

---

# 織姫と彦星と未来都市

楠木あいら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

織姫と彦星と未来都市

### 【Nコード】

N4868T

### 【作者名】

楠木あいら

### 【あらすじ】

ドーム型の人工都市『外夢の町』にある新エネルギー『外夢』を制御できる彦星ただ1人。彦星には織姫がいて。織姫には幼なじみの主人公がいます。

恋愛&新エネルギー&七夕物語といったところです。

## よつこそ外夢の町へ

### 1 新しい都市

この都市には、一匹のモンスターと七夕伝説が存在する。  
ただ、純粹ではない。

#### 人工都市、外夢の町そとゆめのまち

一つの都市を半球ドームで覆い閉ざした空間都市には、人口といふ名の自然が外の世界と同じように存在している。

灰色に覆われたアスファルトに通じ抜ける風を始め、全てを照らす日差し、降り注ぐ雨すべてが都市のコンピューターにより管

理されていた。

特殊なエネルギーでこの都市は生きていた。

ドーム内面積、5万平方キロメートル。

3万人の人間が全て人工で出来た未来都市に住んでいる。

「外夢の町はなあ、エネルギーに困ることはないのさ」

その町へと向かう車の中、助手席にどっかりと座る先輩は後輩に説明した。

「節電、節電といわれてますが…他の町と同じじゃないですか」

先輩の話し相手をしながら運転する後輩は、少しづつ大きく見え  
てくるメタル色のドームに得体のしれない不気味さを感じた。

高速を降り賑やかな市街地を通り抜けて数時間すすむと店や住宅  
がまばらになって、しまいには見かけなくなった。

長いトンネルが明けたら、木一本ない荒野にたどり着いた。

ここは本当に日本なのか？次元を超えて異世界に来てしまったのではないのかと不安がる後輩の目に『外夢の町まで10キロ』

という看板が目に入った。

「外とは比べ物にならないんだよ」

先輩はタバコを口にした。人工都市は完全禁煙なのでいまのうちに吸っておこうという考えなのだが、あいにく後輩の車は禁煙

にしていた。

後輩がそれを伝える勇気はなく、先輩は白い息を吐き出した。

「この都市にはなあ、原子力発電所がなくても、電気があるんだよ」

「じゃあ、風力が火力ですか？」

先輩は否定を口にせず、後輩の頭を軽く叩いた。

「バカモン、それじゃあ話にならないだろ。」

モンスターだよ。

都市中央に発電所の塔があつて、そこに住む1匹のモンスターがとてつもないエネルギーを作り出しているんだよ」

「町の真ん中に発電所？モンスター？どういう事ですか意味わかりませんよ」

「今いった通りだ。塔にいるモンスターが電気を作っているんだ」

「町の真ん中つて危険じゃないですか」

「バカモン、100パーセントクリーンで安全だ」

「モンスターが…ゲームみたいな話ですね」

後輩の言葉を口にしても、おかしくないのだが…

「殴るぞ」

先輩は宣言する前に行動した。

(井荒、単語けしておく)

先輩の見事な平手打ちを後頭部に当たり、車は車線を越えた。

「せせ、先輩。何するんですか」

「車線を越えたつて、他に車がないから問題ない。」

問題は、町の発電所をうちの会社が作ったのに知らないお前の頭の方だ」

「関係者でした…わ、待つてください井荒先輩」

再びつつこみを入れようとした先輩、井荒の手は当たることにはなかった。

「田崎、入社して何年になるんだよ」

「どうやら、呆れて殴る気力が失せたらしい。」

「しかも、先月まで開発部にいたんだろ」

「そうなんです…試験管を洗えだとか、使った資料を片付けておけだとか雑用だけで。詳しい事…そもそも何を開発しているの

かすら、さっぱりで」

「……………」

会社の未来に不安を感じる井荒であった。

巨大ドームは威圧させるほど間近に迫っていた。

メタル色をしたドーム都市『外夢の町』の入り口は、壁とかわらない大きな自動扉が音もなくスライドし、ぱっくりと大きな口を開けた。

田崎は一呼吸してからアクセルを踏む。

視界に入り込んできた光景は不安だけであった。

前方に灰色の壁のような建物が一つ。それだけが圧迫するようにそびえたっているのだから。

念のため左右を見回したが、肉眼で見る限り、建物や人一人見かけないコンクリート製の大地が続いているだけだった。

「……………」

「ビビんなんて。ここは立体駐車場だ。ここで外の車を置いていく

んだ」

「外つて。町の外から持つてきた車は使えないんですか？」

井荒の言うとおり、前方に立体駐車場を表す看板が目に入ったので、ほつとしながら田崎は疑問を口に出ることが出来た。

「使えないっていうよりも、ガソリンスタンドがない。中は電気車だよ。」

「ここはエネルギーに困る事はないからな」

車を入り口に止め荷物を取り、初めて会った町の住人兼駐車場の管理人に車を預ける。

数メートル歩き殺風景なドアを開け、これまた殺風景な長く広くはない通路を進んだ。

「ビビる準備でもしておくんだな、町、初心者和田崎君」

通路の出口が見えるようになってから、井荒は後輩にニヤリと笑った。

「さつきはビビるなって言ったくせに。何がすごいんですか？」

「外夢の町は半球のメタルドームに覆われた町だ」

井荒は扉を開けた。

「これは……」

通路を出た田崎は、空を見上げた。

メタル色のドームに覆われているはずなのに、青空が広がっていた。町の外にある空と何一つ変わらないのだ。

「これが町の中央にすむモンスターの力だ。」

ドーム内側に張り巡らされたスクリーンで映像化された人工の空だ。

中央のコンピューターで天候は自由自在に変えられる」

「じゃあ、ボタン一つでこの都市は雨にも雪にもなるんですか？」

「ああ。膨大なエネルギーがあるから何でも人工でできるんだ」

「……へえ……」

人工都市『外夢の町』

1匹のモンスターにより成り立っている。

## 未来都市の住人たち（1）

### 2．未来都市の住人たち

私の幼なじみ差南 揺西さみなみやうせいは男なのに織姫という役目を持っている。

「……………」

教室の窓際に立つ揺西は、空を見上げた。

「彦星が呼んでいるの？」

向かい合わせに立つ二木海値ふたぎみちは、返答する揺西に明るい笑みをみせた。

「なら、行こうよ。ほら、ぼーっとしていないで」

巨大スクリーンに覆われた人工都市は外の世界とあわせて同じ天気、気温、湿度まで変わらない。

通っている高等学校を出ると、外の世界同様梅雨明け後の青い空が広がっていた。

「海値。何度も、言うけれども。彦星の涙羽なみうとは、偶然、選ばれただけだからな」

隣、歩く揺西は何度も聞いたことがある言葉を使い、私を安心させようとする。

「わかってるって」

『涙羽は、かわいそうだから……………』そう続ける事も嫌というほど聞いている。

学校を出た私達は中央エリアへと向かう。

人工都市『外夢の町』は、ゼロから町を作り出した所。

なので幾つかのエリアに分かれている。



居住エリア。オフィスエリア。商業エリア。工業エリア。医療エリア。学校施設エリア。歓楽街エリア。  
それから中央エリア。

人工都市の心臓となるエネルギー発電の塔があるから『心臓エリア』とも呼ばれている。

エネルギーを創り出すモンスター『外夢』とそれを制御する『彦星』がいる塔。

彦星は涙羽という少女が役目をはたしていた。

彼女はエネルギーを放出し続けるモンスター『外夢』を制御できる『適格者』と認められたため、塔に閉じ込められる身となってしまう。

七夕伝説で牛をひいて田を耕す若者彦星のように。

彦星、涙羽は天の川の向こうへ出ることができなかつた。

ただ一日。織姫と会うことができる『七夕の日』を待ち望みながら。

「……………」

でも、彼女が望めば織姫はいつでも会うことができた。

運命の一日はモンスターが休息の一日をとるため。彼女が塔から解放される日を指しているだけで、涙羽が放つテレパシーが織姫に選ばれてしまった、揺西に届いてしまう。

「……………」

なのに私は笑顔で揺西と一緒に向かうことができた。

揺西とは幼稚園以来の仲で、涙羽がある日突然揺西を織姫と決めるよりもずっと前に、私達の心は通じているのだから。

これからも。

高校がある学校施設エリアから中央エリアへは5分とかからず、塔のある中心へはさらに5分。

淡い銀色をした柱型の高層ビル。

それが発電所、外夢のエネルギー施設であった。

円中型の自動回転ドアの左右には警備員が立っているけれども、場違いな高校生呼び止められることない。

扉から出た足は鏡のように磨かれた床に触れ、頭上は筒抜けの広い空間が迎いれてくれた。

正面奥にいる受付のお姉さん達に会釈だけして、私達は左奥にあるエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターから地下へ。

10階ほど沈んで目的地にたどり着いた。

開かれた扉の先に、私たちにとって見慣れた光景が現れた。

NASAの宇宙センターみたいな所。初めて見た私が出した感想だった。

巨大モニターに向けられ並べられている、様々な管理コンピューターの類に、それを操作する人たち。

「揺西君に海値ちゃん」

顔なじみの関係者から声をかけられ、とまどうことなくあいさつする。

「こんにちは」

私は足を止めるものの、揺西は奥へと進む、メインルームへと。

「……」

そして毎回のように、私は揺西の背中が自動ドアが閉まるまで微動谷せず見送った。

見送り終わった視線は巨大モニターに向かう。

巨大モニターには、広い空間の中に大小二つの柱型保存施設を一つの物体しかなくて、一つの物体である揺西は小さい方の保存施設に向かっていた。

大きな保存施設には巨大モンスターが、今もエネルギーを放出し続けているが塔と同じ色をした素材のせいで目にする事ができない。

「……………」  
小さな保存施設にはガラスのような素材で作られていて、中を細部まで観察することができる。

清純な少女、彦星の役割りを持つ涙羽の姿が。  
純白のワンピースに長い黒髪は、中に入っている液体のせいで、ふわりとなびびっていて神秘的だった。

「プライベートタイムに入りました。  
緊急感知機能を除いた全てのサウンド映像機能をOFFにします」  
揺西の姿が消えた。

深緑色の背景に『Private mode』という白い文字があるだけの巨大モニターに変わった時、複数の人達が私に同情の視線を向ける。

でも、それは間違いではない。  
私達は心からつながっているから。無理に思い込んでいるわけでもない。長い年月を経て、この生活に慣れてしまった。そう言った方が早いと思う。

「……………」  
とはいえ、運命の日が間近に迫っている今は、少しだけ別。……………」  
でも、それが過ぎるまでのこと。それが過ぎれば、また元の生活に戻っていった。

毎年、去年も一昨年も。変わらず繰り返されてきたのだから。  
……………」  
海値は巨大モニターを見つめた。

「育成ルームに行くので揺西に伝えてもらえませんか？」  
仲の良い職員さんに、いつもの言葉を言ってから私は揺西から背を向けエレベーターに向かう。

「わ……………」  
いつものように誰もいない空間に入るとばかり思い込んでいたので、開かれた扉から大勢の人が出てきたので頭が軽く混乱した。

「わっ。わわわ」

それはエレベーターにいた方も同じで、重要設備に女子高生がいるとは考えようがない。

驚きの声ときょっとした視線が向けられたが、それは数人だけでほとんどの人達は何事もなかったように歩き出していた。

ぶつかってしまうと思った瞬間、誰かに手を引つ張られていた。

引つ張られるままに、私は壁の方へ進むと、繋がっていた手が離れ、手の持ち主は私の前に背を向けてたっていた。

ぶつかなように壁になつてくれたらしい。

エレベーターに乗れる数は少なく、団体はあつという間に通り過ぎていた。

「…あ、あの」

「たざきー、何してんだ？」

「あ、はいはい。今、行きます」

声をかけようとした時にはもう、壁になつてくれた恩人さんは誰かに呼ばれ、団体に向かつていった。

「これがエネルギー発電装置、外夢です」

群集に戻つた田崎は説明する職員が指す巨大モニターを見上げだが、そこには「Private mode」という文字が書かれていた。

「申し訳ありません。たつた今、エネルギーメインルームに織姫が入り、映像をシャットダウンしています。」

とはいえ中は灰色の大きな容器があるだけで、エネルギーを放出するモニター『外夢』をご覧にすることはできません」

「容器を見ても、仕方ねえな」

エネルギーメインルームに来た団体の一人、井荒は聞こえない程度に言葉を漏らした。

「映像が戻る前に、ご説明いたします。」

我が『外夢』の発電は原子力とほとんど変わりません。

原子力は、原子核が中性子を吸収し核分裂を起こす際に発生する熱、エネルギーを使い、水を加熱し蒸気を発生させ、蒸気タービンを回して発電し、それを送電します」

「……………」

井荒は、ほけつとする後輩、田崎を肘で突つつき、小声で凶星を口にした。

「お前、わかってないだろう……」

…の後は『俺もすぐには理解できなかったが』という事実があるが、先輩としてのプライドがそれを隠した。

「要は物凄いエネルギーを利用してタービンを回して発電させる。自転車こいで前輪のライトを作るのと同じだ」

「ずいぶん安っぽくなりましたね。最近の自転車は自動でつきますよ」

田崎の感想に軽く突っ込みをいれたが、思いの外、いい音が団体の耳に届いてしまった。

団体の『何をしているんだ』という視線を何人かが向けたが、すぐに職員に視線を戻した。

「外夢そとゆめの場合もほとんど変わりません。

外夢はAnggという新しい特殊な気体を放出し、それを二酸化炭素と融合させることにより発生するエネルギーから蒸気を作りタービンを回します」

聞いたことのない物質や融合方法に団体は軽くざわついたが、すぐに静まった。

職員の説明を聞くために

団体が一番聞きたいことは、一つの情報だった。

外夢の隣にあるもう一つの設備、そこにいる一つの存在。

だから誰ともなく職員にちらりちらりと向ける目が、それを訴えていた。

「えーっと。まだ、ご覧になれませんが、外夢の隣には制御システムがあり、外夢の放出エネルギーを調整します。簡単に言うならば、

蛇口のようなものです」

「その蛇口に、アンドロイドが使われているんですね」  
無言でいられなくなった団体の一人が口にした。

群集の視線は発言したもものから、職員に戻っていくが、その目が強く変化していた。

「はい。外夢の外見が牛に近いことから『彦星』という人造人間が容器の中に納められています。アンドロイドこと『涙羽』<sup>るいゅう</sup>は、送られてきた信号を読み取り、指示を外夢に送ります」

「わざわざアンドロイドを仲介する必要はあるんですか？」

「ありません。外夢は自分が選んだ者にしか反応しません。」

外夢は彦星、涙羽同様、人の手により作り出されたモンスターでありますが。一つの生物でもあり、好き嫌いの精神的なものが存在します」

「今日のようにアンドロイドが、一人の少年に会わなければならぬのは、どうしてですか？」

「彦星、涙羽は人間に近い状態です。彼女が人工であること以外、ほぼ人間と言っても過言ではないでしょう。人間と同じ精神を持つ彦星にとって織姫の存在は心の支えになります。」

彦星、涙羽の精神を安定させることにより、外夢の放出エネルギーも安定し、それを使うこの都市も安定した生活を送ることができ  
ます」

団体はさらに質問をはじめたが、井荒のところでどうでもよい内容  
に変わっていったため、聞き取る機能を遮断させた。

## 未来都市の住人たち(2)

「アンドロイドはすごかったですね。本当に人みたいで驚きました。地下でエネルギー見学を終え後、田崎は子供のように目をキラキラと輝かしていた。」

団体は解散し、自由に動けるようになった2人は施設内休憩所に移動した。

「外夢も見れるようにすれば良いのに。ただの容器でしたからね…。でも、ものすごく大きかったですね、天井にくつつきそうで

したよ、あれは」

「そりゃそうさ都市一つ分のエネルギーを作り出すところだ。原発を比べればあまりにも小さすぎる」

「それは、そうですが。」

でも、外夢、みたかったなあ。どんな姿なんでしょうね」

田崎は、すわり心地の良いソファーにどっかり座る先輩に販売機から取り出したコーヒーを渡す。

「彦星の家畜の牛、のモンスターってことはミノタウルスとかかな」「容器で隠してあるということはグロイんだろ。」

「ってか、たざつち。知っているか？外夢の黒い噂」

後輩を愛称で呼ぶ時は井荒の機嫌が良い時か裏めいた暴露話があると田崎は知っている。

「外夢はなあ、訳ありの人間が素になっている」

「ほ、本当なんですか？」

田崎は念のため人がいない事を確かめてから小声で返答した。

「何でも死刑が確定された極悪非道人を改造したんだとよ」

「か、改造」

「あくまでも、噂だ」

「なんだ、驚かさないでくださいよ」

ほっと胸をなでおろした田崎であったが

「いいや、驚け」

「どっちなんですか、先輩」

「いいか、たざつち。黒い噂はここからだ」

先輩の闇のような笑みは消えなかった。

「彦星、涙羽はアンドロイドではない」

「え…へ？どういうことですか？じゃあ彦星は」

「人間さ」

「ほ…本当なんですか？でも、彦星はガラスみたいな密室に閉じ込められているじゃないですか。それも24時間365日ず

「…と」

「正確には364日だ。彦星涙羽には日曜も祝日もなく、自由もない。労働基準法どころか人権無視もいいところだ。

だから、涙羽は人造人間という事になっている」

「…そんな」

「この大きな都市を維持するためにな。」

田崎、俺らがエネルギー室に入った時、ちょうど彦星と織姫が面会している所だったな」

「ええ」

「2人だけのプライベートだから映像、音声オフした中、彦星は織姫に何を言ったんだろうな。どんな切実なる思いをぶちまけ

たところで、織姫以外の耳に届かない」

「でも、先輩。いくら何でも」

「ありえなくはないさ。」

たざつち。ここは密閉された、閉じ込められた都市だ。その中で何が起きてても表に出にくい、な」

「……………」



「とはいえ、あくまでも噂だ。情報がすくなくければ噂はわいてくるものだ」

居荒は噂という言葉を使い、話を終わらせた。

「が、後輩田崎が一息つくことはできなかった。

「せせせ、せせんぱ：きゃ」

男の悲鳴に居荒は驚くよりも、うざったさを感じたが見殺しにできないので、とりあえず振り返った。

振り返った先輩は、後輩田崎が悲鳴をあげるのも無理はないと思っただ。

思ったが、驚くこともなければ助けようもしない…。

居荒は、奇妙なそれを何なんか知っているのだから。

牛、というべきだろうか、牛みたいなその生物は灰色の床につきそうなほど長い毛をたれながしていた。

大きさはポニーぐらいあった。普通の牛を考えれば子供と大人の間、少年というところだろう。

「聞いて驚け、たざっち」

「驚いていられません。た、助けてください」

たざっちは、その奇妙な牛に睨まれていた。

どうも、気に入らない所があるらしい。

「……」

奇妙な生き物は『気に入らない奴』に頭突きをくらわそうとしたが、悲鳴をあげながらもかわされたので、さらに機嫌をわるく

していた。

「わわわっ」

それは田崎も読みとつたらしく、第二撃に狙う殺意を嫌でも感じとるしかなかった。

「いいか、たざっち。これは、あの外夢のクローンだ。だから、キズつけるなよ」

「傷つけられそうになっているのに、何、のんきな事言ってるんで

すかつ。わっわっ」

外夢クローンは、一歩二歩と間合いをつめたらしく、田崎の悲鳴声が高くなった。

先輩居荒は、さすがに後輩の危機に不安を感じたが、このモンスターを止めるすべを知らないので、後輩に言葉を送るし

かなかった。

「大丈夫だ、たざっち。これは労災になる」

「変な慰めしないでください。その前に見捨て…」

田崎の言葉が途絶えた。どうやら、突進、寸前になったらしい。

『短い間だったが、お前は便利な後輩だったよ』と、本気かはわからないが、諦めかけた時、一つの声があがった。

「小一、やめなさいっ」

それは女性、それも若いものだなと居荒が判断できた頃には、モンスターは突進をやめていた。

「…助かった」

「後輩が血みどろの肉塊にならなくてすんだか……」

「何ですか、先輩。その無言は」

うらめしそうな目を向ける田崎を無視し、居荒はご機嫌な表情で頭をすり付けられている少女に視線を向けた。

『ほっ…』

外夢の町に3、4回滞在している居荒にとって、高校の制服を着た少女を知っていた。

『織姫の彼女か…』

居荒の視線に女子高生、海値は何を考えているのかわかったが表情を変えることはなかった。

「あれ？君は地下のメインルームにいた」

落ち着けた田崎も海値に気づいた。

その言葉で海値も『さっきの恩人さん』である事を知った。

「あ、あの時はどうもありがとうございました」

『いえいえ』と頭をかき腰の低そうな恩人田崎の姿は優しそうな人に映った。

あまりにも人が良さそうで隣の抜け目のなさそうな先輩らしき人にこき使われていそうにも映っていたが…

「海値ちゃん。その子は1かい?」

『第一印象が良ければ、皆、フレンドリー』がモットーである居荒にとって海値は愛称で呼んでいた。

海値はさすがにぎよっとしたが、施設の職員から呼ばれているので『まあ、いいか』とあきらめることにした。

「はい、これは外夢の一番目にあたる小一こいつです」

「こいつが…」

絶対口にするであろう、くだらないダジャレを言ったのは居荒ではなく田崎の方であった。

ひゆるると冷たい風が吹く前に、先輩のつつこみがクリーンヒットした。

「俺が言おうとしたギャグを使うな」

後輩とレベルは変わらないようだ。

海値はこのまま2人の漫才を見ていたかったけれども頼まれごを口にした。

「ところでUEVコーポレーションの居荒さんと田崎さんですか?」

「その通りUEV社期待の営業マン居荒と頼りないお供一匹だが」

「先輩…」

さぞ楽しい社内なんだろう。

「…。戸立うたてさんが探してましたよ」

「え?戸立さんが?Bエリアの休憩室で待っていてくれて」

「ここはDエリアですよ」

「あれ?」

どうやらエリアを間違えていたらしいが…

「いたたつ。先輩、何をするんですか」

「うるさい、八つ当たりだ」

開き直っていた。人のせいにはしないのは良い事なのだが…

「Bエリアは右の通路をまっすぐ進めばつきますよ」

「そうかい。ありがとう、みっちゃん」

居荒は親しみレベルを上げたようだ。

「ほら、田崎、さっさと行くぞ」

「先輩、叩きながら歩くのはやめてください」

「……………」

バシバシ叩く手が頭から肩に移り軽く引き寄せたのは、DエリアとBエリアの間にあるCエリアロビーであった。

「わ、何ですか、先輩」

「おめでとう、たざっち君。君は人工都市『外夢の町』第一日目にして、主要人物&生物すべてに会うことができた。これは凄

いことなんだからな」

「主要人物って彦星と織姫、外夢のクローンの事ですか？」

「二木海値もだ。あの娘は織姫の恋人と言われている」

「恋人」

「現実の七夕伝説は純粹にできていないんだよ、たざっち」

居荒はニヤリと笑った。

「しかもみっちゃんは、小一に好かれている。あの生物は好き嫌いが激しく。唯一、みっちゃんにだけ懐いている」

「じゃあ…もしも、現役のエネルギーモンスター外夢が引退したら、彼女が…」

「かもしれないな。」

だが、そんな生々しい世の中にはならないようだ」

「それは、どういう…」

聞きたかった田崎本人の口が閉ざした。

2人は目的地エリアにたどり着こうとし、施設の人間、戸立の耳に入りそうな距離に入ったから。



## 旧暦7月

巨大スクリーンに覆われた人工都市は、町の外、一般の世界と変わらない。

というのもドーム外に設置されている『外夢の町 气象台』で観測されたデータを随時受信し、人工の空を随時買えているからであつた。

馬鹿げただけの天候なのに政府は『未来のために必要』と言い張り、一般市民は『未来』という言葉と、これにより税金が上がることはないので反対する者はいなかった。町の中央にいるクリーンなモンスターによるエネルギーのおかげで。

一般世界と変わらない天候を味わえても、大雪や大雨がくるのはありがたいくないが。

「わざわざエネルギーを使ってまで何で暑くしなければならんだ？無意味にもほどがあるよ」

人工都市関係者でもある織姫、揺西が空という超巨大スクリーンを睨みながら愚痴つた。

「外の一般世界と同じにするなら避暑地にしてほしいよ。軽井沢とか北海道とか…」

飲み終えた炭酸飲料の空き缶を片手で潰す揺西は、海値からみれば小学生みたいであつた。

「将来、空中都市や宇宙都市を作る時の試作だつて聞いたことがあるよ」

「それだつたらなおさら快適都市にしてほしいよ。あー暑い暑い暑い」

2人は遊び盛りの高校二年であるが勉強盛りの教育期間であり、快適施設の図書館に行ったのだが…

「何だよ…まだ怒っているのか海値」

「怒っているんじゃないよ。十分もしないで居眠り

する？」

船を漕ぎ始めた揺西に注意したものの、その数分もたたず…揺西は支えられなくなった顔を机にダイブした。

その派手な音と周りの視線に耐えきれず、即刻図書館から逃げ出したのはいうまでもない。

「昨日、3時まで起きてたから。その状態で英語なんて勉強したら眠くなって当然」

図書館から開放された瞬間、眠気が吹っ飛び、開き直っている揺西に返答する気力はない。

「海値、アイス食べよう」

図書館を出た2人は商業エリアに行った。外町商店街を抜けた先に次の目的地のゲームセンターがあるのだが、揺西の手は右折しよと引つ張り始める。

「良豆屋の小豆バー食べようよ」

「今、ジュース飲んだばかりなのに。お腹こわすよ」

「子供扱いするなよ」

『十分子供だって』と口にださないことにした。

海値は繋いでいた手を離すと、揺西は風船のように飛び出して行ったが、3歩目で戻ってきた。

揺西はにっと笑いまっすぐに手を差し出した。

「行こう、海値」

改めて目の前の恋人を『小学生』だなぁと認識する海値であった。繋ぎあう手は年々大きくなっていくものの、伝わってくる気配は小学生の時と変わらない。

店は込んでいた。

飲みかけのジュースがある海値は繋いでいた手を離し、店の外にあるベンチで待つことにした。

「もう7月かぁ」

この季節、7月から旧暦7月（8月上旬）までの間、商店街エリ

アは至るところに七夕の飾りを見かける。

笹の葉には長方形の紙や鎖にした飾りが色とりどりに散らばっていた。

風に吹かれ、微かになびく様子を無感情に見つめるもののジューズを持つ手は苛だたけに缶の周りを撫でていた。

水滴が海値の手のひらに移り、手首に滑り落ちていく。

「7月なんか…」

旧暦7月7日は、エネルギー製造モンスター『外夢』が眠りにつくため、外夢を制御する彦星は一日だけ解放される。

外夢が眠りにつく事により、当然エネルギー、電気の供給もなくなる。

自家発電施設が各エリアに設置してあるから完全な停電ではないが、そのエネルギーはライフラインが保てる程度のもの。信号や街灯。病院。マンションや団地にある貯水タンクの汲み上げなどで、ほとんどの事ができなくなってしまう。

最低限度のエネルギー内で普段通りの生活ができないどころかハイテク化された警備体制がアナログ化に切り替わるため、治安が一気に悪化する。

そのため健全な市民は一日中屋内に閉じこもるか旧暦7月7日の影響のないドーム外へ出かける。

「……………」

海値の家族も例外ではなく。夏休みを兼ねて海だ、山だ、キャンプだ、避暑地だ。いや、いつそのこと海外へ…

と、毎年熱心に家族会議を開いている。

一人残して

「海値は？今年こそ行くつよ」

目的地が決まってから家族が、お約束に聞いてくるが

「お祭り、揺西と行く約束してるから」

毎年、同じ言葉を繰り返し、首を横に振る。



「そう」

その後に向ける同情の視線も毎年恒例となり、慣れてしまった。

「……………」

『揺西と少しでも、一秒でも長く一緒にいたいと思うのは、彦星の存在のせい…嫉妬なのかな…』

風に揺れる笹の葉を無感情に見つめたままだったがそれを解除した。

「海値、お待たせ」

戻ってきた揺西を見つめるためであった。

彦星、涙羽の揺西を呼ぶテレパシーは旧暦7月7日に向けて多くなるが、七夕が終われば彦星、涙羽からのテレパシーは揺西に届くことはなくなる。

そう、すべては7月7日までの事。

海値は立ち上がる前にジューズを飲み干した時。同時に手首に付いていた水滴が落ちていった。

「こともあろうに太股の内側へ」

「……………」

それを見送ってから、まっすぐ見上げると揺西と目が合った。

「今の見てた？」

「見てない見てない」

「嘘。じゃあ、どうして視線をそらすのよ」

立ち上がって、逃げ出すように先を歩き出した揺西を追った。

嘘か本当は揺西の顔を見ればすぐわかる…とはいえ、駆け出した揺西を見れば一目瞭然なのだ。

『揺西』と声を出して2、3歩目で足が止まった。

「だ、誰か」

男性らしい悲鳴が響いた。

「な、何？」

数秒前の逃走を忘れ戻ってきた揺西は好奇心を持った目で路地裏の方向を見つめた。

「近くまで、行ってみようよ」

「やだよ。喧嘩だったら巻き込まれる」

もつと安全な所へ揺西を引っ張ろうとしたが、やめた。

「わわわっ」

路地裏から転がるように出てきた男の後ろから、のっしのっしと姿を現した『それ』を目にした海値は走り出す。

「小一君、何でこんな所にいるのよっ」

ポニーサイズの長毛である次世代のエネルギーモンスターが、ここにいた。

「ぶもっ」

海値の姿に気づいた小一は脱走に悪びれた表情一つせず、甘えた

(?)泣き声で近づいていった。

「助かった…あれ、君は」

海値は被害者になるところだった者に視線を向けた。

「この前の恩人…さん？」

手の出やすい先輩と哀れな後輩の漫才を見て数週間の時が流れていたため、海値の記憶は少し曖昧になっていた。

「海値。今頃、施設から脱走の連絡が来たよ…って知り合い？」

携帯画面を見ていた揺西は哀れなサラリーマンに気づいた。

「うん、恩人さんだよ。この前、人ごみに巻き込まれた時、助けてくれたんだ」

「ふーん」

同性とあつてか揺西の興味は薄いものだったが、全くナシではないのは海値が向ける笑顔だろう。

「それはそうと…海値、小一、連れていくしかないのか」

ゲームセンターに行きたい揺西にとって面倒くさい事ではなく、海値もそれを読み取っている。

「じゃあ、揺西は先に行つて。小一君送り届けたら急いで戻つてくるから」

「海値が行くなら、俺も行く」

『子供みたいだな。高校生だからそんなものか』

2人の様子を初めて見た田崎は織姫、揺西の感想を心の中で述べた。

「すみません。私も一緒にしてよろしいですか？」

「ええ、いいですよ」

不満顔で許可する揺西に田崎は苦笑いするしかなかった。迷子から抜け出すためには仕方がなかったのだ。

「いやあ、まだ二度目だつていうのに、裏路地の営業に回れつて言われて…」

最初の出会いから2週間後の再会で、さらにホツとした田崎だったが、その手にはハンカチがあり、流れ出る汗を拭いていた。

噴き出る汗は恥ずかしい迷子になってからか、暑い夏だからか。

それとも異様に向けてくる人々の視線のせいなのかは分からないが。

「…だから小一と歩きたくなかつたんだよ」

「耐えるのみよ…揺西」

人々の視線はもちろん海値と揺西の間でご機嫌に歩く牛みたいな生物だが『その生物と共に歩く人達は何者なんだ？』と、ついでに向けられてしまう。

小一がただの牛だとしても街中で目にすれば注目を浴びるというのに…。灰色の長毛でポニーサイズとなればなおさらであろう。

外夢の町に住む者たちは外夢というモンスターがエネルギーを作っている事は常識でも、どんな姿をしているのか知らない。ましてや、外夢のクローンなど皆無であった。

だからこそ人々は目の前にいる奇妙な生物を見続けてしまう。

「迷うつて…京都や札幌みたいに暮盤みたいに整っているのに？」

揺西の言葉に加えるならば、丸い町はピザに切れ目を入れたように8本の大道路が中央から外側に向かっている。

その大道路に沿って規則正しく縦横の道が作られ、建物がある。

「小一に後をつけられて、冷静に考えられなかったんです…」

「後をつけられたって変ね。だって小一君は塔の中で管理されているんですよ。そりゃ塔の中ならよく脱走しているんだけど」

「良く脱走できるって…塔の奴らの管理の問題じゃないか…」

「ははは…でも、どうして私を追いかけてくるんでしょうね…」

頭をかき汗を拭く田崎の存在に、揺西の声に棘がある事を海値は気づいていた。

揺西は子供のように喜怒哀楽を表す。

何の関わりのない田崎に当たる様子に不快を思いながらも口にするのではなく、海値は左隣にいる小一に視線を向けた。

「ぶもう」

小一はそんな海値を慰めようとしているのか、それとも塔外脱走を開き直っているのかはわからないが、機嫌の良い泣き声をしていった。

塔に近づいた時、突然、揺西が足を止めて空を見上げた。

その姿はまるで人形の様に表情が消えて、それから訴えるように幼なじみに向ける。

「涙羽。呼んでいるのね」

「ああ」

「いつてらっしやい」

「…うん」

素直にうなづく揺西であったが小一の右隣に戻ると『海値』と小さく呼んだ。

「何?…」

小一の左隣にいる海値は素直に振り向き

「……。よ、揺西」

まっすぐ見つめる揺西がいた。海値の左隣にいる存在を無視してか、それとも釘をさしたのかは、わからないが。

## 織姫と彦星と牛

「……………」  
残された二人は『気まづい空気』を味わうしかなかった。

2人はとりあえず塔に向かって歩き出す。

田崎は汗を拭いてから、その空間を断ち切った。

「小一…（小一に睨まれた）さんってオスなんですか？メスなんですか？」

「小一君って呼んでいるけれども…性別なんて聞いたことがないですな。」

小一君、君はオスなの？メスなの？」

「ぶもっ」

海値になでられてご機嫌に鳴いた。

「田崎さん、夏休みはどうするんですか？」

旧暦7月（8月上旬）海値に言われて田崎は、お盆休みが近づいていることを思い出した。

「そついえば休みなんですな。仕事に追われてすっかり忘れてましたよ。」

高校生の海値より年上なのだが、言葉遣いの腰は低いようだ。

「お盆休みは、せつかく『外夢の町』にいるんだから堪能しようと思っっています。お祭りがすごいらしいですね。」

エネルギーモンスターが稼働を停止し、彦星と織姫が再会をはたす旧暦7月7日の前三日間。町は観光客を取り入れようと七夕祭りを考えた。

未来都市という珍しさがあり、車を使わなければたどり着けない離れた所にあるのにもかかわらず、町祭りは毎年盛り上がってくれた。

田崎の言葉に海値は、にこっと笑った。

「実は、パレードに私も参加するんですよ。」

「彦星・織姫大会ですか？」

観光客を狙って催しも色々ある。

彦星・織姫の扮装した者たちが集まりパレードに参加したり、どの組が一番似合いの者たちが競った。祭りの日は臨時のレンタル衣装屋が開かれているので、ふらりとやってきた観光客でもエントリーが可能であり、もちろん優勝すれば豪華商品が貰える。

海値は首を横に振った。

「違いますよ。塔側の、といっても小一君のお守りですけどもね。町のシンボルであるエネルギーモンスターの公開する事になったので」

海値の声は小さくなり辺りに人はいないか伺った。

「メインはアンドロイドなんですけどね」

アンドロイド疑惑

エネルギーモンスターを24時間監視を続けている涙羽の存在は誰も知っている。

彦星、涙羽は人間ではないかという疑いがかけられていた。

関係者は疑いを晴らすためアンドロイドをパレードに出そうと計画していた。

「わけありませんね、でも」

「織姫の連れでしかない、ただの女子高生がどうして知っているか、でしょ」

「はい。こういう事は内密ごとだと、先輩が言っていました」

田崎の言葉はすでに知っていると表していた。

「えー知っていたんですか。じゃあ、お披露目するアンドロイドのモデルが私だって事は？」

田崎は苦笑で返答し、付け加えた。

「小一さんもパレードに出るって聞いてましたから。小一さんに一番なついているのは海値さんだけですから。」

将来、小一さんがエネルギーモンスターになった時、海値さんそっくりなアンドロイドなら制御しやすいんじゃないかって、聞きま

した」

「へえ、田崎さん達って、すごい関係者なんですね」

「すごいのは会社と先輩だけです」

その環境にいられる事事態すごいのだが、謙虚な田崎は、それを  
出さず汗を拭き頭をかいた。

「僕なんか滞在していたホテルを追い出されて、塔の職員にたのん  
で何とか生活している状況です」

ホテルを追い出された。

それを聞いてほとんどの者は何か問題を起こしたんじゃないかと  
田崎の人格を疑うだろう。

しかし、海値は違った。それは彼女の取り巻く環境のせいであっ  
たが。

「当然ですよ。お祭り前だから予約いっぱいだし。電気が止まる七  
夕の日にお客を泊めることはできませんよ」

最低限度の電気しか使えない犯罪多発の一日でもあるのでたい  
いの店はシャッターを閉じて商売よりも安全な一日を優先していた。

「塔内なら安全ですよ。関係者以外入れませんし。当日はほとんど  
の人がいないし。何より町の建物と違って冷房が効いてますよ」

田崎はわずかながら海値の顔が曇るのを読み取った。

『なぜ、海値さんが当日の塔内状況を知っているのか聞かない方が  
いいでしょう』

田崎が何も言わず歩き、目の前に迫った塔を見上げた。

「小一！探したんだからな」

塔内にたどり着いた途端、小一関係者たちがどつと押し寄せてき  
た。

関係者たちは小一と海値を取り囲むと、あつという間の勢いで塔  
の奥へ消えていってしまった。

「……………」

一人取り残された田崎はしばらくぼかんとしていたが、苦笑に変  
え今来た道を戻り始めた。



中央エリア、エネルギー発電の塔

「プライベートタイムに入りました。

緊急感知機能を除いた全てのサウンド映像機能をOFFにします」  
機械のような感情のないアナウンスが流れてからメインルームに入った揺西は歩き出した。

透明とメタル色の大小二つの柱しかない広く、高い空間を進む揺西の視線は透明な柱を見続けている。

それは、水の入ったコップを逆さにしたようだった。ベタという尾ヒレを優雅になびかせて泳ぐ色鮮やかな熱帯魚を閉じ込めたまま。  
「涙羽」

ベタは赤や青色をしたオスだが、塔に閉じ込められているベタはシルク色のワンピースと長い黒髪を水中でなびかせていた。

「揺西……」  
外見は揺西とほとんど変わらないだろうか。顔のパーツは海値と正反対にできている。

大人しい……というより人形のように生気がないと言った方が早いだろう。

少女の声は耳ではなく、揺西の頭中に直接届いた。  
ガラスの中から僅かに笑みを作り出して、同じ言葉の形を唇が作っていた。

「揺西。来てくれたんだ……嬉しい」  
まっすぐな黒髪が涙羽の動きに従って左右になびいた。

揺西は微笑み、いつものようにガラスに両手をつけ顔を近づける。  
涙羽の手が伸びた。  
ガラスの壁を隔て涙羽の手が触れる。

「……………」  
2人は何も言わず、互いを見つめあい、長い時間を過ごした。

「……………」

涙羽はほとんど話さない。それは彼女が会話を必要としない環境にいるからであろう。

俺が織姫に選ばれたのは小学3年の春だった。

その時は涙羽はアンドロイドだと聞かされていたから、単純に、能天気話しかけていた。

涙羽の返答が機械みたいに同じ言葉しか返さないのも、アンドロイドだからと納得する事ができた。

違和感を持ち始めたのは、中学に入ってから。

時が流れるのと共に涙羽の髪が伸びて、俺や海値と同じように成長しているように見えた。

疑問を口にした時、誰もが『気のせい』だと口を揃え、俺もうなづいたが、少しずつ濁った世界を感じ取り始めた。

『濁った大人たちの都合よく嘘をつく世界』を目の当たりしたのは、純粹なる滴

涙羽が涙を流した時だった。

「涙羽…泣いているの？アンドロイドって泣くの？」

「……」

涙羽は何も言葉を放つことはなく、ただ、ただ泣き続けていた。

涙羽の周りにはある『呼吸できる液体』から新たなる液体が生まれでた。空中にはなったシャボン玉のようだとも今でも鮮明に覚えている。

「……」

それは明らかに人間のする行為ではなく、問いただした。

涙羽が同じ人間だとあっさりと答えたのは、隠しても無駄だと判断したからであろう。

奴らは反論しようとする俺よりも早く口を開いた。

「エネルギーモンスター外夢は涙羽以外の彦星を認めない。  
涙羽がいなければ、この町は生きていけない」  
反論できなかった俺は、その日から共犯者になった。

「……………」

その言葉を覆す事ができずに、今までの時が流れていった。  
涙羽は決して今の環境に文句を言わない。  
ただ涙を流すだけだった。  
長い永い時の中、彼女はこの閉ざされたガラスの器ですごさなければならぬ。

ただ、一匹のモンスターを制御するために。  
ただ、一つの町にエネルギーを維持するためだけに。

「……………」

そんな涙羽にできる事は、俺しかいなかった。  
涙羽の呼びかけに答えることしか。

「揺西…もう少しだね」

涙羽は笑みを浮かべ言った。

「もう少しで、本当に会えるんだね」

「……………。ああ」

涙羽の支えになりたい。

でも…運命の日を素直に喜べない自分がある。

## 塔の中で眠る影

「純粋な涙羽の心を傷つける事になるわね」

その者は揺西が持つ胸のうちを鋭く言い放った。

エネルギーセンター制御管理室長、戸立<sup>こたち</sup>

その名の通り、制御管理をする。早い話、涙羽の管理係である。

涙羽のいるエネルギー室を出た揺西は、いつものようにエネルギー制御管理室に向かった。

部屋は数台のパソコンらしき機械と長い机が置かれ、そこで涙羽の状態を監視し続ける者、戸立がいる。

戸立は40代を少し過ぎた女性で、長い髪を一つにまとめ、平均的な体型を白衣で覆っていた。

眼鏡の似合うキャリアウーマンといった感じであろう。

「……………」

美人かもしれないが揺西は好きになれなかった。

「だけどさ…戸立さん。俺だって人間なんだよ」

揺西がこの部屋を訪れる理由は涙羽の状態を報告するためだったが、いつからか不安を吐き出す場所になっていた。

海値とつきあっていながら涙羽の支えになり続けるのは、今の揺西にとって負担であり、不安でしかない。

涙羽とは織姫と彦星の関係だけれども、揺西には現実があつて海値がいる。

しかし、涙羽は幼なじみの恋人がいるなど知る由もなく。彦星と織姫という特別な関係だと思っっている。

涙羽の純粋な目は語り。表情は特別な人のためだけの笑顔を向けているのだから。

「もうちょっと先になったら、外夢はエネルギーモンスターの役目

を終えるって聞いたの。

そうしたら、ずっと揺西と一緒にいられるんだよ」

いつの日は涙羽は無邪気な笑みを浮かべそう言っていた。

それは、そういう意味だろうと揺西はわかっていた。

いや、俺がそう勝手に思い込んでいるのだろうか？…できるならば、そうであってほしい。

「あら、涙羽だって人間なのよ」

長い思考は戸立さんの返答で戻された。

「……………」

戸立はマイナスしか言わないとわかっていたが、戸立以外の人に話すことはできなかった。

涙羽が人間であることを語れ、しかも二人の思い加われば海値にすら言葉を吐き出せないのだから。

「隠しているのに、よくぬけぬけと言えますね」

「ここは聞かれたらマズイ人間はいないからね」

この制御管理室は戸立専用の部屋になっているので2人だけしかない。

「……………」

「迷っているのね」

その言葉に揺西の顔が変わる。

「迷っているって、俺が？何を？どうしてですか？」

『何を』というものの揺西の声には怒気が含まれており、明らかに知っている事を言い表していた。

「涙羽に向ける感情に決まっているじゃない。みつちゃんがいるから涙羽を愛しさを向けられない。涙羽がいるからみつちゃんに愛しさをむけられない」

「俺が好きなのは海値だけです」

言い切る揺西に戸立はため息をついた。

戸立の目から見た揺西と海値は幼なじみ以上の仲には見えなかった。

『というより意地になっている。2人は意地になってつきあい続けているようにしか見えない』

その言葉は何度となく口にしてみたが揺西は怒りの反論をする。

『それは、あんたが涙羽を、エネルギーを優先して考えているから、そう見えるんだよ』

これ以上、言葉を口にすれば揺西が暴れだすのは目にみえていた。「……………」

かといって、このまま黙っていても重い空気のまま変わらないが。

「戸立さんは、いや、あの女は仕事の事しか考えていない。だから平気で言えるんだよ。」

意地になっっているだと。「冗談じゃねえ」

制御管理室を出た揺西は目にとまった壁に蹴りつけ怒りを表した。白い壁を淡い水色の床が続く通路を進むと深緑色の床に変わり、少人数用の休憩室にたどり着いた。

揺西は誰もいないのを確認すると抹茶色のソファーにどすんと音をたてて座る。

「つたく、冗談じゃねえよ」

向かい合わせてある隣のソファーに足を乗せたかったが高級そうなテーブルに阻まれ、足をかける勇氣はなかった。

「……………」

それから揺西は右奥にある二つのエレベーターに目をやったが双方とも動く気配はない。

海値に小一の面倒や今回のように彦星涙羽に呼ばれた場合、ここにある専用のエレベーターを使ってあがっていく。

ここで待つてれば、必ず会えるので二人の待合場所になっていた。「……………」

揺西は主人を待つ飼犬のように耳をすませエレベーターの上に

あるランプから目を離そうとはしなかった。

『意地になっているって？馬鹿馬鹿しい』

海値の家は近所にあるので物心ついた時には、もう行動を共にしていた。

海値が何を考えているのかわかる。それは海値も同じだ。

「意地になっているなんて、ありえない」

海値といるだけで安心できるし。心が繋がっている気がする。

そう確信の言葉を思い浮かべているうちに眠ってしまったのは、快適な空気が送られてくると、夜遅くまでゲームしていたからである。

「……」

目を開けると左隣に海値がいた。

近くの自動販売機で買ったジュースの紙コップを両手で持ち中身を見つめていた。

「祭りの予定で何かあったの？」

表情がないから、何か考えているのも見落とすことなんてない。

「え？ううん、何も問題なんてないよ」

「……。まあ、こついう時もある。」

「目が覚めたんなら帰ろう。それとも……」

海値の会話が途切れたのは、揺西の顔が近づいてきたからであった。

両方の手を伸ばして海値を絡めようとするものの、海値は揺西から離れるように立ち上がった。

「海値？」

海値は視線を合わせようとはせず、首を振った。

それから僅かに顔を右にずらして揺西にその方向を見るよう訴えた。

「……………」

揺西が視線を向けてみると、そこにはスーツを着た男が2人から視線をそらしていた。

『人がいるんだから、恥ずかしいでしょ』と顔で言う海値に苦笑するしかなかった。



## 七夕祭り

旧暦7月7日の3日前に人工都市の七夕祭りが始まる。

祭りの日だけは必ず快晴になり、じわりじわりと町を照らした。

朝、人工都市で目を覚ましたほとんどの者が『この日が来た』と口にしたことだろう。

宿初施設で目を覚ました観光客は、これから起こるイベントに喜びを

主催者側は各自が受け持つ仕事の責任。

そして地元であり、塔の関係者である2人は複雑なため息をついた。

「ただいまより、外夢の町、七夕祭りを開催します。

脂ぎった顔をハンカチで拭きながら市長が開始の言葉を言い放つと控えていた楽器隊からファンファーレの演奏が始まり、祭りの合図を大勢の人に知らせるための花火が打ち上げられた。

会場は町の中央、エネルギー施設のある塔敷地内にある中庭で行われている。

会場に集まっているのは偉そうな権力者たちと町のPRにはかせないマスコミたちであった。

ニュースや新聞の著いネタにしようとデータを納めていたが、どよめきが上がった。

市長が開始宣言してまもなく、市長の手から、はたまた自分らが座っている何の変哲もないコンクリート、芝生から突如として無数に近い白い物体が浮かび上がってきたのだから。

白い『それ』は最初2・3センチの球体だったが上昇していくにつれて上、左右に突起が出て、それが鳥、鳩に変化した。

どよめきが歓声に変わる頃、会場に居合わせた者たちは、鳩になった物体から羽ばたきの音を耳にした。

「すごいな、これが外夢の町が持つ力か」

「えーと。鳩、鳩です。地面から現れた球体が鳩に変わりました。今、飛んでいきました」

権力者たちは目を真ん丸くし、アナウンサーは驚きをリポートする中

「鳩は映像なんですよ。知ってましたか田崎さん」

その様子を塔の3階休憩所から観察していた海値は案内人のように説明した。

「映像って…あの鳩が映像なんですか？」

「pillarっていう方法を使っていると聞いたことがあります。地上とドーム天井部分に特殊な装置があつて、映像の柱になっているんです」

「映像の柱ですか」

「はい。柱自体は見えませんが柱の範囲内ならば、今飛んだ鳩どころか架空動物でさえも可能なんですよ」

会場で起きた鳩の仕掛けは、会場内に大きめの装置をつけているので無数の鳩を飛ばすことができた。

「へええ。やっぱり、この町はすごいですね」

「pillarは町の至るところにあつて、祭りの期間中だけ様々な映像が流れるんですよ。夜になれば、もっとすごい映像になるんですよ」

「みーち、時間だよ」

後ろのソファーにどっかりと座っている揺西は時計を見ずに知らせた。

「時間って、戸立さん来ていないよ」

窓側で会話することに嫉妬しているのはわかっていたので、海値はそれを口にしないことにした。

「田崎さん。会社の人達が動き回っていたのに、のんびりしているの？」

揺西の棘を感じる言葉にシャツにズボンにネクタイをしめている田崎は視線を壁にそらした。

「いやあ、朝は体調がよくなって」

「サボるために体調悪くなったっていうやつ？」

「え、あ。そのう……まえ。あはは」

2人の会話を聞いていた海値は疑問を口にした。

「でも、今、お盆休みじゃなかったんですか？」

「そうなんです、社会人となれば休み関係なく働かないとならない時があるんですよ。社長がくるとなれば……」

「社長って……偉い人なのに、サボろうとするつもり？」

呆れ顔の揺西にごまかし笑いをする田崎であったが……それが一気に凍りついた。

休憩室前にある右側のエレベーターが止まり、開かれた扉から

「ふはははっ。たーざーきー、仮病を使うとはいい度胸だな」

「ひいひい」

悪の三流魔王のような先輩居荒の登場に、後輩は雑魚モンスターのよような悲鳴をあげた。

「俺が体調不良になって祭りを堪能するんだから、お前は大人しく働け」

有無を言わず田崎の後ろ襟首をつかみ閉まるうとしたエスカレーターの手を足で止めて、中に入った。

「世話になったな」

居荒は言葉を残し、雑魚モンスターと共に姿を消した。

「何か、先行き不安な会社だな」

海値は苦笑して問いかけるため揺西を見た。

居荒が『世話になった』と言った時、視線は揺西に向けられていた。田崎をつかまない手には携帯電話が握られていた。

揺西が居荒に告げ口メールを出すにもアドレスを知ってないと送信できないが、戸立女史を通せば不可能ではない。

「……………」

海値の問いたげな視線に気づいたのか無意識に判断したのかはわからないが、海値を見つめにつきり笑った。

「海値、それ似合っているよ」

田崎との会話と居荒の一騒動で触れることができなかったが、海値は祭りの衣装に着替えていた。

「でもさあ、何で海値が彦星役なの？」

小一の見張り、脱走防止役としてアンドロイド披露パレードに参加することとなった海値は、青い着物、漢服を着ていた。

髪も結び上げた髪を丸め水色の布で包み白いリボンでとめている。リボンは長く、海値の腰あたりまで垂れ下がっていた。

「そりゃあ、アンドロイドがメインだもん」

左側のエレベーターが開いた。

3階休憩室前に足を踏み入れたのは、夏用スーツを上着まで着た男2人と1人の女性、戸立であった。

「みつちゃん、揺西君」

戸立と呼ばれ、2人は3人の所に歩み寄った。

「紹介します。こちらは二木海値さん。今日のパレードに参加します」

織姫の役目を持つ揺西よりも先に紹介された海値は戸惑いながらも一礼した。

「という事はM c i - 8 5 5 0のモデルになった子だね」

どうやらアンドロイドを作った会社の偉い人のようだ。

白髪が混じった初老の男に見られている中、戸立が紹介してくれた。

「みつちゃん、揺西君。こちらの方はU E V コーポレーションの素<sup>そ</sup>宇野社長と広報部の素<sup>うの</sup>宇野部長よ」

高校生にとって『社長』という『遠い世界だけでもすごい存在』に目をばちくりとした。

それから社長と同じ苗字にの気づいた。血の繋がっているから部長という立場になれたんだらうなと推測していた。

社長の横で鋭い目を向ける部長は田崎よりも年上だが居荒よりは下だと判断できた。

それから2人は居荒たちと同じ会社の人だと気づいた。

「戸立さん。そっちの子は例の子かい？」

ぶしつけな言い方にむつとする揺西だったが、口にするのはなく表情を僅かに歪ませる程度に抑えた。

「はい。織姫に選ばれた尾原おはら揺西君です」

揺西も一礼するものの、じろじろとまとわりつく様な視線に不快でならない。

「ぶもっ」

揺西を救ってくれたのは後方の通路から飼育係に連れられてきた気楽な生き物だった。

「あれは外夢のクローン。小一ですか小二ですか？まさか三ではないはず」

若い管理職人は灰色長毛の生物を揺西以上の好奇心の目を向けた。ちなみに外夢のクローン外夢小一は外夢の小さい一号という意味で小一と名づけられている。

「ぶもっ？」

小一は見慣れない人物に気づいたが近づくことはなく、大好きな海値に歩み寄った。

「小一です」

権力という言葉に縛られない生物に戸立は苦笑するしかなかった。「ぶもっ」

上機嫌な小一は海値に頭を擦り付け、頭をなでてくれとせがんでいた。

「小一が。大きくなったな」

社長は自ら小一に歩み寄り背中をなでた。

社長は自ら小一に歩み寄り背中をなでた。

「しゃっ…触っても大丈夫なんですか」

エネルギーを放出するモンスターのクローンだから感電すると思つての発言であろう。

「外夢はAnggという新しい特殊な気体を放出し、それを二酸化炭

素と融合させることにより発生するエネルギーから蒸気を作りターピンを回す」

「そうですね…でも」

「外夢たちは、その作動装置がない限り、なんの変わらない生物だ。それに、お嬢さんたちが普通に接しているのではないか、気づかないのか」

「はあ…そうですね」

「失礼します」

後方の通路から1人の職員が現れた。

一体のアンドロイドと共に

「ほう」

初めて目の当たりにする広報部長は目を見開き、社長は目を細めた。

「……………」

海値と同じ顔をしたアンドロイドはゆっくりとだが、人間の動作と変わりはなかった。

海値の青い彦星衣装に対しアンドロイドの織姫衣装は赤が使われている。赤そのものではなく白やピンクを使ったヒロインらしい漢服であった。

海値より長い髪を結び上げ、紅をつけた唇は海値よりも大人っぽくみえた。

「素晴らしい出来だ」

「これが本物ならば…なんですけどねえ」

ため息交じりに言う戸立の言葉に誰もがうなづき、改めて機械を見つめた。

海値と同じ姿をした『それ』が歩けるのも、止まり、少しぎこちないが人間に見える笑顔が作れるのも、機械の後ろにいる職員のリモコン操作によるものだった。

「だが、人の目は誤魔化せられるだろう」

「パレードは車の荷台に透明な囲いの中織姫と彦星、外夢小一を乗

せませす。職員は車の助手席に座り、モニターを見ながら操作します」  
「そんなに離れて大丈夫なのか。もし、それが無様に倒れたりでもしたら、おしまいなんだぞ」

「ご安心を部長。リモコン操作は20メートル離れたところでも、繊細な表情を作ることができます。車に乗せた状態を何度もテストしていますし、操作する者も厳選なる審査のうえ……」

まだ納得のいかない部長の顔を見て、話が長引くと見抜いた揺西は数歩さがり、海値に目で合図した。

「俺、探しに行くから」

揺西は団体に一礼して通路を歩いていった。

## 恋人たちのイベント(1)

昨日

「うん。で、目星はついているの？」

2人の会話は、夜のイベントによるものだった。

開会式で鳩を出した映像柱の装置 pillar は、さらなるエネルギーを使うため(3日後の休息を迎える外夢の放出エネルギーが跳ね上がり、それを処分するためとも言われている)イベントが催された。

都市内157箇所を設置してある pillar が祭りの日だけ起動し様々な立体映像が流れ人々を楽しませる。

夕方5時になると pillar は一度映像を消して夜の7時7分まで待機モードに入る。

時間になると156箇所は夜用の映像が始まるのだが、1箇所だけ特別な映像が流れた。

その場所に恋人が居合わせたならば、永遠に結ばれると言われており恋人達が躍りになって探すイベントであった。

しかも pillar は直径1メートルしかないので幸運は毎年一組だけとなる。

pillar は都市の端まで散らばっており幸運の1箇所もランダムとなる。

海値と揺西がイベントに参加して5回目となるが幸運とやらは降りてくれない。

「ランダムだからなあ、感を頼りにするしかないというよりも、157箇所しかないから場所とりに専念した方がいいな。

場所をとつたらメールするよ」

毎年、祭りの間は最高気温が27度に設定されている。

祭りの間は一般世界の天気と関係なく快晴で夕立のおそれもなく、



大いに楽しむことができた。

「ここが人に管理されたドーム年である事を揺西は改めて実感してしまっ。」

肌をじりじりと焼く日も人工で、それを一匹のモンスターが作り出していることも。

「……………」

実感しなければならなかった。

揺西はエネルギー発電の塔を出て大通りを住宅エリアに向かって進んでいると、祭りを中継するリポートの声が聞こえた。

「さあ、パレードの先頭が見えてきました。」

まずは町のシンボルである外夢です」

揺西は立ち止まり車道に視線を向けた。

祭りの間は一般車は歩行者天国になっているのでパレード用の車がゆっくりと視界に入りこんでくる。

「今、荷台にいるのは、この町のエネルギーを作り出す時期外夢、のクローンモンスターです。」

そして、その両脇に並んでいるのが話題となっているアンドロイドと、そのモデルとなった二木海値さん。

どちらがアンドロイドで、どちらが二木海値さんなのですが…皆さんはわかりますか？」

「あの人たちもよく考えるよな…」

そう呆れながらも揺西の視線は近づいてくる車、青い彦星衣装を着た海値を見続けた。

海値は役になりきっているのか、ただ緊張しているだけなのか、胸を張りまっすぐ進行方向を見つめていた。

揺西の目には少しこわばった表情が勇ましい同性のように見えた。

「……………」

海値は…

見慣れ過ぎているはずなのに、他人の様に見えた。

それは見慣れない服のせいか、人形、隣のアンドロイドもどきが

いる違和感なのか…

海値が遠くに感じる。

さっきまで手を伸ばせば、触れられたのに。

「……………」

周りの声、雑音が揺西の耳に入り込むようになった。

海値が振り返ることはなく、乗り物は揺西の前を通り過ぎ、そして視界から消えていった。

「気づけよ…」

それから揺西は携帯を取り出し、祭りの事が載っている『外夢の町サイト』にアクセスする。

トップページに『157分の1になろう!!』という項目に進んだ表示されたページには、こう載っていた。

『157分の1になろう!!』

- 1 ・過去の記録
- 2 ・傾向と対策
- 3 ・要注意エリアはここだ!!
- 4 ・恋人達の勝利インタビュー
- 5 ・掲示板

揺西は2 ・傾向と対策に進む。

「……………」

祭り前から開いて何度も目にした文章は1文字たりとも変わっていないが、それでも揺西は目を通した。

過去データからして、商業エリアが多いが、ここ最近では都市外れに転々としています。

しかし今年はイベントが始まって10回目、区切りのいい数字です。

イベント研究会が出した本命は、中央エリアか商業エリア！  
大穴を狙うならば都市外れで決まり！」

「中央か商業……」

揺西はウェブを終了させ歩き出した。

人工の日差しが揺西の髪に照りつけ、考える力を奪い、頭に浮かぶ言葉は不満で埋め尽くされた。

「本命とか大穴とかほざいているけれども、それ以前の問題をなんとかしろよな……」

年々話題になりつつあるイベントは、幸運を手に入れようとする恋人達の数も増してきている。取り合いになり喧嘩騒ぎも起きていたが、何も処置されていない。

恋人たちのイベントは157分の1よりも数百分の157の確率になっていた。

「この時間じゃ本命どころか、大穴エリアも無理だな」

揺西は目にとまったコンビニに足を向ける。

イベントの場所取りは花見や運動会のと変わりはなく、時がくるまで見張りをしなければならない。

去年までは2人で見張っていたので、食料の補給など何の苦も感じなかった。

「海値のかば。何でパレードなんか出るんだよ」

小一のお守りであり、アンドロイドのモデルになっているのだから仕方ないのはわかっている。

しかし頭で納得できても心は納得してくれない。

「……………」

仏頂面だった揺西は、足を止めるほどの事に気づいた。

「そっか。俺、寂しいんだ。海値が恋しくて仕方がないんだ」

海値が好きでいる事の証に気づいた揺西は、顔をほころばせた。

自分が本当に恋している事。それを実感できることに安堵していた。

戸立から何度となく海値との交際を否定され激怒したものの、そ

の度に揺西は僅かな不安にさいなまれていた。

この激怒は本物だろうか。

その疑問に気づくと揺西は考えることを恐れ、自分に怒りを覚えた。

『何かんがえているんだよ。俺と海値はつきあっているんだからな』  
自分に言葉を叩きつけるものの、心の奥に住む同じ姿をした揺西はニヤニヤ笑っていた。

『偽りなんかじゃない。俺は本当に海値が好きなんだ』

夏の日差しにさらされてるのにもかかわらず、揺西の心は小春日和のように穏やかであった。

食料と大量の飲み物を買ひ、戦闘準備を整えた揺西は方々を歩き回ったものの、恋人達のイベントとなる157箇所のpillarはどこも人であふれていた。

揺西はため息をつく和海値にメールを打ち込んだ。『いつものpillarで待っている』と

『いつものpillar』というのは住宅エリアにある、ほとんど見過ごしてしまう所であり、地元の2人でさえ偶然に見つけることができた滑り止めのpillarであった。

その場所は住宅街のど真ん中にある。

公園と幼稚園、保育所。それから放課後に子供を預けられる学童保育の施設が集中する子供エリアでpillarは子供エリアの真ん中にある公園のジャングルジムの真ん中にあった。

「しっかし変なところに設定したよな。ウケを狙ってか、それとも設定ミスか」

ただ、あまりにもマイナーすぎる場所なので当たりpillarに選ばれることはないだろう。ということである。

「あち〜」

夏の日差しは揺西をせきたてて歩行速度をあげた。

目的地の公園、ジャングルジム…横にあるベンチへ

公園はさほど大きくはなく、まず広場が目に入った。ブランコやシーソーは手前にあり、揺西が目的とするジャングルジムや砂場は奥で、その間に木陰に覆われたベンチが配置されているのだが…

男が座っていた。

「うそだろ…」

滑り止めでさえ取られてしまった状況に愕然とする揺西だが、男が1人だけで女性がいない事に気づき全身を始めた。もしかしたら万が一にも違つかもしれないという気になり、だめもとで聞いてみようと考えたからであった。

「……」

前進する足が速まった。

「田崎さんっ」

「へ？わっ、揺西君。どどどどうして、ここまで…」

加速した理由は相手が田崎だったからで、一方の田崎はものすごく動揺していた。

おそらく、いや間違いなく、仕事を抜け出してきたのだろう。

「連絡しませんよ」

田崎の動揺を見抜いて『この人は本当に社会人なのか？』と疑う揺西であった。

「ただし、そのpillarを譲ってくれれば」

「その…pillarって？」

…

どうやら田崎は、純粋にサボるために、ここのベンチを使用していたようだ。

「あ、もしかして海値さんが言っていた、夜になるともつとすごい事が起きるって言っていたイベントですか？一体、どんな事が起きるんですか？」

田崎の口から海値の名前を聞いてムツとする揺西であったが、子犬のように目をキラキラさせて、話をせがむサラリーマンに仕方な

くpillarについて語るため、田崎の横に座った。

「へえ。ロマンチックですね」

ありきたりの感想を述べてから田崎は、これまたありきたりな質問をした。

「もちろん、海値とすこすためにきたんですよ」

先を読んだ揺西が答えてしまったが。

「ははは。いいですね、相手がいると」

「田崎さんは彼女、いないんですか」

幼なじみになれなれない男に親しみをもてない揺西だが、涼風が通り過ぎる木陰から出る気はなく、なんとなく話しかけてしまった。

「彼女ですか、ここに来る一ヶ月前に別れたからフリーなんですよ」

高校生に敬語を使うサラリーマンから予想もなかった言葉に揺西は田崎を見つめてしまい、慌ててジャングルジムに視線を移した。

木陰から見るジャングルジムは直射日光が降り注ぎ少しまぶしいが、その真ん中にあるpillarの映像は1本の大きな笹に短冊や飾りが一つ一つ取り付けられていくもので、さらりさらりと揺れている。

笹は大きくゆれ、ないはずなのに葉がこすれる音が聞こえるような錯覚を感じた。

「まるで風鈴のような映像ですね」

田崎の発言に揺西は再び視線を向けてから、心の中でうなづいた。

「それにしても…誰もいないんですね。私たち以外には」

田崎は夏休みなのに人がいない公園を見渡した。

風鈴のような光景の効力が続くことはなく、『夏の大会』となるセミが騒ぎ立てている。

しかも、人工のセミが。

人工の町、しかもドームが覆う町で自然のセミは存在せず、セミを知らず大人になる子供の将来を心配して、教育機関に要請した。

毎年、夏休み前になると役人たちが借りだされ、せつせと音声機

能がついたセミの模型を木に取り付けるといふ、涙ぐましい光景がみられるといふ。

「そりゃあ、祭りだから、いるわけないですよ。」

祭りが終われば停電になるんだから祭りに行かないで旅行に出かけている所もあるし」

「そうですねか…じゃあ、誰も来ません、よね」

田崎は辺りをキョロキョロと見回してから、腕にかけていた上着をベンチに置くとおもむろに立ち上がった。

まっすぐ進み、ジャングルジムに到着すると鉄の棒に手をかけたが、揺西の存在を思い出して振り返る。

「あのう…揺西君。このことは誰にも言わないでください」

やはり田崎はジャングルジムに上るらしい。

「はあ」

ネクタイを緩めてから、足を一段目の棒に乗せて片腕と片足だけで体と持ち上げる。

「これは…結構、大変な作業だったんですね…子供の頃は難なくこなしていたのに」

体力はないみたいだが、中肉中背のサラリーマンが苦戦する様はこっけいに見えた。

揺西は笑うことなく無関心に眺め、それから田崎の歓声を聞いた。「何とかあがれましたよ。いやあ、子供はすごいですね。これを毎日こなすなんて」

「最近の子供はめったに遊びませんよ」

揺西は冷たくあしらい、コンビニで買ったペットボトルの蓋を開けた。

炭酸飲料でのどを潤し、背もたれに身を預ける。

『いい大人のくせして、まるで子供みたいだな』

揺西が出した田崎の感想は、田崎が出した揺西のものと変わらぬいが、2人が互いの感想を知ったら気を害するのは間違いないだろう。

「……………」

揺西はポケットから携帯電話を取り出し時計をみるものの、ほとんど変わらない数字にため息をついた。

「つまんねえ…」

海値がいなくても、こんなにつまらないものか。

いつもだつて。そう毎日24時間一緒じゃないっていうのに。

学校だつて同性の友達と行動しているし。クラス違うし。日が沈めば自分の家に戻っていく。

その間、会いたくなくてメールするけれども。

こんなに1人がつまらないと思つたことはない。

『それは今日が祭りという特別な日だからじゃないのか?』

その声は揺西の頭にしか聞こえない、心の声だつた。

『かもしれないな。去年まで3日間ずーっと一緒にいたんだから』

『それだけじゃないだろう』

揺西に話す心の声は何でも知っている。

『恐れているんだろう? 奴らを』

揺西は何も答えなかった。

『海値が奴ら、塔の関係者たちの手元において、もしかしたら海値も彼女みたいに捕らえられて、二度と会えなくなるんじゃないかっていう不安がよ』

揺西は返答を拒否した。

『もし、本当にそうなつちまったら、どうするんだい?』

どっちに行く? まったく同じに閉じ込められた海値と涙羽…』

揺西はおしゃべりな心声を強制終了させた。

揺西の精神は心を押さえつけられる余裕が残っていた。

『俺は海値を選ぶ』

だが押さえつけられたはずの心は揺西からするりとかわした。

『じゃあ、なぜ俺の声を消したんだ? 海値に負い目を感じているから耐えられなかったんだろう』

『違う。冗談じゃねえ。負い目なんて、あるわけないだろ』



『なら、なぜ怒る？なぜ、彦星に会いに行く？』

『それは俺が織姫に選ばれたからだ』

『選ばれただけなら、なぜ、そんなに悩んでいるんだ？』

『悩んでいるだど？』

『そう、お前は悩んでいる。彦星、涙羽の純粋な笑みを見て。お前、いや、俺は悩んでいるのだ』

『それは涙羽に悪いと思っっているからだ。涙羽を彼女として見られないからだ』

『ふうん』

『何だよ』

『じゃあ、なぜ、好きな海値に口付け止まりなんだ』

他の者には聞こえない『心の声』に揺西はさっと表情を変え、耳を赤く変色させた。

『それはっ。それは、もしもの事だ。まだ高校生だっというのに取り返しのつかない事になるのが気になるし…第一、海値の了承だってない』

心の声は何も言わなかった。しかし、それは明らかに挑発した無言であった。

揺西も心の声と向かい会うことができたのならば、相手の胸ぐらをつかみ突っかかりたかった。

しかし相手は実体のない自分。揺西は嘲笑する心の声に腹立たしく思うことしかできないでいた。

## 恋人たちのイベント(2)

人々の物珍しそうに向ける視線が自分たちに向けられているのがわかる。

「……………」  
人の声が雑音となり、観光客に伝える放送が騒音となって海値の耳に聞こえるが、頭の中までは届かない。

つまらない

アンドロイドのモデルとなって小一君、外夢のクローンと一緒にパレードにでられるなんて、普通の高校生じゃありえない凄いことなのに。

しかも荷台には小一君とアンドロイドを維持するため(クーラーがかかっているから、優遇うけているのに

それなのに

「……………」

海値は近くから向ける視線に気づきゆっくりとした動作で小一をなでた。

見世物パレードの間、隣に並べられているアンドロイド風機械と同じようにゆっくりと動かなければならない。僅かに表情を変え笑みを作る事が許されているが、機械にプログラムされていない怒りや悲しみ。ましてやしゃべることなど言語道断である。

それらすべてエネルギー施設にいる彦星、涙羽が人間ではなくアンドロイドだと隠すために。

揺西を離そうとするため。

「ぶも？」

行動の制限がないというより、制限することができない小一は海値に不安げな声をだした。

『大丈夫よ、小一君。馬鹿なことなんて考えすらしていないから』  
小一の声を勝手に解釈し、口を開かず答えた内容など小一がわかるはずがないが『大好きな海値が、さつきより元気になった』と判断したのか、小一は頭を正面に向け華やかな光景をじっと観察し始めた。

人形のように動かない海値は、ぼんやりと祭りの様子を見続けていた。

人工都市『外夢の町』の七夕祭りは、物珍しさもあって賑わいが衰えることはない。

ましてやアンドロイドだとか未来のエネルギーを担うクローンだとか未来の匂いがする珍しいものとなれば、好奇心がうずかない観光客はいないだろう。

「……………」  
その視線を、観光客と同じ人間の海値にも向ける。

一斉に見られる視線に、最初、海値を戸惑わせたが、時の流れと共に『私はおまけ』という言葉が浮かび、気を落ち着かせることができた。

落ち着かせたというより、自分は蚊帳の外にいる事を認識させ、揺西と会えない事で憂鬱になってしまった。

「……………」  
車の荷台から見下ろす見物人の頭が、黒くうごめく蟻のように見えた。

そう思うのは、このパレードが、祭りが、どうでもいい事になっているからだろう。

「……………」  
見物人、黒い蟻たちは食料を運ぶ行列のように道路の端に並んで中央のパレードを見物している。

となると私は女王蟻になるのかな、いや、獲物のようね。私は見物なんだから。

パレードは午前と午後の2回。それが3日間あるのだから6回ある。

それが終われば、開放される。

蟻の行列から開放された海値は表情ある人間と戻った。

日の暮れた時刻、夏の激しさがとれた人工都市とはいえ、とても涼しいとはいえないが、開放された海値にとっては心地よいものを感じてしまう。

翼を手に入れたよに海値の軽やかな足は揺西のいる公園に進んだ。

「……」

揺西は木陰のベンチで前のめりになって居眠りをしていた。

「おや、海値さん……」

公園の先客、ジャングルジムに上ったものの直射日光に負け、揺西の隣にいた田崎の声が途切れたのは、すばーんと空になったペットボトルで揺西の後頭部を（軽く）叩いたから。

「わっ……って海値、なんだよ突然」

「それはこっちのセリフだからね。人はつまらないでいたのに、すやすや眠っていられるなんて」

「はあ？こつちだってなあ pillar を見張って動けなかったんだからな」

ムツとした顔を見合わせる2人は第3者の視線によって離れた。

「あの……。海値さん、居荒先輩たちを見かけましたか？」

やっと再会した2人に邪魔するのは悪いが、居荒たちに会いたくない田崎は（サボった事に）分が悪いと思いつつも口を開いた。

「さあ？朝、見かけたきりですよ」

「そうですね……そうですね。海値さんと関係ないし」

苦笑して立ち上がった田崎は公園の出口に向かって歩き出したが5歩目で足を止めて振り返った。

「田崎さん、ここにいた事は居荒さんたちには言わないよ」

「揺西君、ありがとう。」

でも、そうじゃないんです。海値さん、小一さんは、安全な所にいますよね」

この場合、田崎が小一に教われない危険性がないかの安全である。海値が安全の太鼓判を押すと安心して公園を出て行った。

「あの人、本当に会社員なの？普通、社長とか偉い人と行動しなければならぬ時にサボれるもん？」

海値は揺西の言葉に笑って肯定を避ける事にした。

「み〜ち。田崎さんの肩を持つわけ」

しかし機嫌の悪くなった揺西にとって、それすら嫉妬の対象になる。

「……」

海値は子供っぽい揺西に不満の表情を浮かべてから、揺西に背を向けて歩き出した。

小学生並みの揺西は膨れっ面を浮かべてから、海値の後を追いつ、ジャングルジムに右手と左足を乗せる。

日の暮れた時刻。人工セミの音声発生時間が終わり、カナカナというひぐらしに変わった。

ジャングルジムを上り終えた海値は最上段の鉄棒に腰を下ろし、揺西ではなく公園を見渡した。

到達した揺西も腰を下ろしたが公園ではなく海値に向く。

揺西の恋愛的挑発行為であった。

海値に好きだと訴えるためであり、それを感じ取る海値にとって嫌ではなかった。

しかし、海値は視線に気づかない振りをして公園から視線を固定した。

隣にいる揺西の視線が痛いほど感じる。

「……………」

意地っ張り小学生揺西は答えてくれない事に固持になり、さらに

続けた。

そのまま気まづいまま時が流れてゆく。

「……………」  
小学生な揺西にとって挑発する恋愛行為は嫌いではないが、自身気まづくなるのは好きではない。

だから…

体勢に気をつけながら、上半身を横に大きく倒し海値の脚上に。  
揺西は脚をジャングルジムの上に伸ばし横になるまでバランスを崩さないように懸命だったが、それが成功すると海値の顔を伺った。  
海値は予想もしなかった揺西の行為には慣れているので慌てることはなかった。

視線を揺西に移動し優しい目で見つめた。

『しょうがないな』と言葉が浮かぶ海値の表情は子供をあやす母親のようであった。

小学生並みだが子ども扱いされたくない揺西はムツとしたが、海値が反応してくれた事に少しほっとした。

静かなる時が流れた。

沈み始める空の色が、ゆっくりと青く変わってゆく。

「……………」  
さつきよりは穏やかだが、気まづい空気は漂っていた。

『ただの無』という空気から『恋愛的空気』へ

2人だけの空間

言葉もなく、動くこともなく。心は…伝わっているのだろうか？  
2人は不安を感じていた。

パレードに引き離されて、ようやく会えたのに。心が完全に報われたようには思えなかった。

「揺西、大丈夫？落ちないでね」

「起きる」

海値の落ち着いた声に揺西の恋愛挑発モードが冷めたらしく、も

そもそも起き上がるうとしたが：バランスの悪いジャングルジムの上、簡単に起き上がるものではない。

体を動かした時点で揺西もそれに気づき、まずは目で訴えた。

「みうち。助けて」

「助けてって、どうすればいいの？」

「落ちないで起き上がれる方法を教えて」

「教えてって……」

海値はあたふたと上半身を軽く動かしうろたえたが、とりあえず冷静に、海値なりに考えた。

「とりあえず……私がどくから……そつから」

「え、頭はどこに置けばいいんだよ」

「鉄棒か何とか支えて。足をジャングルジムの上に移動して仰向けにする体勢になってから、起き上がれば、何とかならない？」

「無理だよ」

「それなら落ちるしかないわよ」

「……」

無言イコール承諾と見なし、海値は揺西から離れた。

海値がいなくなりジャングルジムで横になった状態から、うつぶせになる。

あとは鉄棒を握り、スムーズとはいかないが、何とか起き上がり、立ち上がって座りなおすことができた。

「……もう、揺西。心配させることしないでよ」

海値の不安げな顔が隣にあった。

「……」

揺西は視線を逸らしたが、すぐに戻した。

「心配させられるのは、こっちの方だよ」

「何で？」

揺西は腕を伸ばしみちの肩を引き寄せる。

「海値が、あいつらの『物』になりそうで恐い。だから明日と明後日のパレードサボって」

「無茶言わないで。学校とは違うんだから。」

それに私かなりそうだったら、揺西はなっているじゃないのよ」「違う。なりたくてなっているんじゃない。涙羽に選ばれたから、あんな所、誰が近づくかよ」

海値は揺西が『彦星』ではなく『涙羽』と呼んだ事に不満を持った。

同じ意味を持つささいな言葉。どっちを使ったとしても変わらないのだが、海値は僅かに眉をあげた。

「…何だよ」

しかし揺西も海値の表情に気づき、その言葉を使うべきではないと後悔した。

過敏に反応してしまうほど、その2文字は2人を支配していた。

「涙羽は可哀想だからだよ。俺が好きなのは海値だけだ」

揺西は安心させるように笑ってみせたが、乾いた安っぽいものではない。

海値は笑みを返した。それから近づいてきた揺西の唇を受け入れた。

安っぽくて何度も使われた言葉だが、海値は信じるしかなかった。この長い口付けも、もしかしたら無意味なものかもしれない。と、海値の脳裏に横切ったが、心の中で否定した。

信じようよ、揺西を

海値は、自分の言葉を信じることにした。

「あ…」

2人が唇が離れた後、海値はそれに気づいた。

時刻は19時を過ぎていてpillarのイベントが始まっていた。

「何だよ、折角待ったのに、今年もハズレかよ」



2人は映像装置 pillarの中に移動した。

夜に始まる pillarのイベント。それは降り注ぐ星。雪が落ちてくる速度で黄色い小さな星が降ってくる。

2人は黄色い光に包まれた。

「揺西、知ってる？この星はねえ、天の川かの星から流れてきた星になっっているんだよ」

「本物の星はこんなに小さくて軽いものじゃないだろうに」

『夢ないなあ』と海値は苦笑したが、文句を言う表情ではなかった。

舞い降りてくる星を見ていと子供のように無邪気になる力があり、揺西は純粹に笑っていた。

「揺西、かわいい」

無防備にさらけ出した顔を見られ、慌てたが揺西の表情はすぐに戻っていく。

同じように笑っている海値を見たから。

子供のような笑顔を互いに見ることができる pillarのイベント。恋人達にとってこれほど嬉しいイベントはないだろう。

「キレイだね」

「ああ」

3センチほどの星を手の平に当てても実体のない映像は通過していく。

しかし、手に触れる瞬間、pillarの粹なプログラムにより光が僅かに強くなった。

それが頭や服に触れるたび、それが起こるのだから pillarのイベントは神秘的なものでもあった。

イベントの力により直前まであったわだかまりを、綺麗に忘れさせてくれた。

ちなみに当たりは降り注ぐ星の代わりにピンク色のハートになる。当たり、ハズレを意識する2人だが金色の光に近い星に包まれると、そんなのどうでも良くなってしまふ。

「来年、一緒に見ようね」

「ああ」

大事なのはpillarのイベントを2人でする事なのだから。  
これ以上、恋人たちに言葉は必要ない。

## 運命の一日

旧暦7月7日

「外夢が放出する総エネルギーが40パーセントまで現象しました」  
機械のように表情がないアナウンスがエネルギー管理施設に響き渡る。

「各エリアにじり自力発電に切り替える『注意』を送信します」

「全てのエリアから承諾、切り替え終了のメッセージを受信」

「外夢のエネルギーが10パーセントまで減少。さらに5パーセント4、3、2、1…」

外夢、エネルギー放出を停止しました」

「外夢を睡眠誘導に進行します。」

外夢の睡眠誘導終了。

外夢は24時間の休止に入ります」

「了解」

制御管理室にいる戸立は、階下にいる職員たちに了承の言葉、休止中の指示を通信で伝え、自分の仕事に取り掛かった。

外夢がエネルギー排出を停止したとはいえ、エネルギー施設内にある自力発電機があり施設内の運営に支障はない。

「エネルギー制御装置、休止に入ります」

宣言を終えると、キーボードを叩く静かな作業が始まる。

キーボードからプログラム、機械語を打ち込むと正面にあるモニターから実行後の返答が出てくる。

涙羽に生命維持水の排出警告…了承

制御装置の生命維持水の排出を全て排出…完了

排出後、涙羽の外見状態：異常なし

脳波、心拍数：異常なし

前年までの旧暦7月7日のデーター平均値の誤差：基準範囲内

「オールクリア。涙羽を装置から開放します」

「了解」

了承の返答を聞いた戸立は立ち上がった。次の作業に取り掛かるため。

エネルギー管理室

がらんとした空間に戸立の足音が響き渡っていく。

万が一に備え数人が管理室で待機し、他の職員達も何かあれば駆けつけられる状態になっていた。

この町にある唯一のエネルギー。もし機能しなくなれば、エネルギーに頼りきった町は生きることができなくなってしまうのだから。

3日間に見せた『湯水のように使っても有り余るエネルギー都市』も一日で変わり果ててしまう。なんとも皮肉な話である。

大切なエネルギーを制御する少女もただ1人しかいない。重要性も外夢と変わらない。

「涙羽」

平日は織姫、揺西しか入れない空間に戸立は足を踏み入れる。車椅子を押して。

白い空間にあるメタル色の巨大な装置を通り過ぎる時、戸立は足を止めて無表情に見上げた。

「……………」

すぐに視線を透明なる装置に向かった。

「涙羽、開けるわよ」

ガラスの器に閉じ込められていた涙羽は、座り近づいてくる戸立をじっと見上げている。

生命を維持する水が排出されてしまったので体にくっついてしまった髪とワンピース姿は、みすばらしく見えてしまう。

しかし目は、待ち続けていた日がついに来たので、熱っぽく爛々と輝いていた。

「やっと来たんだね。織姫と揺西と会える日が」

涙羽の声が戸立の耳に届く。純粹な外見とかわらない透き通った声が。

「ええ」

短い返事を聞き取り、涙羽は立ち上がる。

ぴったりとくっついた白色のワンピースは涙羽の体の線を捉えていた。

力を加えたら折れてしまうのではと思えてしまう華奢な体型で平均より細いが、緩やかな曲線を描いている。

「……………」

24時間ほとんど動かず、食事も生命維持水でまかなっているのにみっちゃんと変わらないのは…

戸立は思考を消したが、別の思考が戸立の頭を占領する。

祭りの日に現れた初老の老人、素宇野そこのU E V コーポレーションの創始者

涙羽の生命維持を始め様々なる開発をこの町に送った者。この町を創ったと言っても過言ではない。

納得できるわね。

「戸立さん？」

涙羽の呼びかけに我に返った戸立、ポケットからカード型のキーを取り出して、しゃがみ、足元に取り付けられている装置にカードを通した。

それから読み取り装置横にあるキーボードに10の指を置き、文章に近いほど長いパスワードを打ち込み、最後に円ターキーを押した。

了承を伝える電子音が短く響いた後。

円柱をした、鳥かごのようなガラスの壁が、ゆっくりと下がり始めてゆく。

その様を戸立は無感情に、涙羽は喜びの表情を作ることすら忘れ、ただじつと物のように見続けていた。

壁が全ての床下に収納された瞬間。

涙羽は開放された。

涙羽を支え車椅子に座らせるため、腕を伸ばした。

ほとんど動かないはずの涙羽にも平均に近い筋肉があるのは、彼女の空気となる『生命維持水』によるものだろう。

ただ、それを使い慣れていない涙羽にとつて歩くことはできても遅く、車椅子に頼らなければならない。

水浸しなのでバスタオルに包まれた涙羽を車椅子に乗せると、2人はエネルギー室を出て職員たちが使用するシャワー室に向かう。

「……………」

戸立さんが車椅子を押してくれる間、通りすぎる人たちは、みんな、目を凝らして私が見えなくなるまで、ずーっと見ていた。

めずらしいのかな

でもいい。ジロジロ見られてもいい。

織姫に、揺西に会えるのならば、他の事は耐えられる。でも、その前にたくさんの検査をしなければならぬ。

戸立さんは言った。

これは涙羽のためにやっているのだと。

私の体に異常はないか

来年と比較するためデータを得るためでもあって

あと…どれぐらい彦星として外夢のエネルギー制御ができるのか。

「……………」  
ガラスの器に1人つきりている事には、もう慣れた。  
ただ辛いのは揺西に会えないこと。

外夢が眠りにつく、この日だけしか揺西と直接話せないこと。大きな揺西の手に触れられないこと。

…。こんな日に考えるのはやめよう。

今日は待ちにまつた『運命の日』なんだから。

織姫と彦星が会える1年でたつた1日なんだから。

「涙羽、終わったわよ。ご苦労様」

涙羽は、眠っている寝台から起き上がった。

「終わったのね。じゃあ、会えるんだね。揺西に会えるんだね」  
「ええ」

再会の場所は毎年、Eエリアの休憩室になっていた。

「揺西」

連れてこられた涙羽は車椅子からゆっくり立ち上がった。

特別な日に用意された1日だけの服は、シャツにミニスカートという普段着だったが、涙羽にとって普段着こそが特別服である。

「揺西：本当に揺西なんだね」

ガラス越しで会い続けているのに、感激のあまり言葉を選ぶ余裕がないようだ。

「……………」

俺も、なんて言葉を返せばいいのかわからず、車椅子に歩み寄って両膝を床につけて涙羽を見上げた。

「じゃあ、涙羽、揺西君。時間になったら携帯で呼ぶわね」

「はい」

涙羽を連れてきた戸立さんは、俺たちを交互に見つめてから背を向けて開かれたエレベーターに消えていく。

「……………」

空間から音が消えて、本当に涙羽と再会した感がわいてきた。

揺西は涙羽の手を両の手で握った。

「涙羽、別の場所に行こう」

海値より少し冷たい涙羽の手は、柔らかくて小さなものだった。

「うん：揺西がいるなら、どこでも、いい」

純粹に言い笑みを向ける涙羽に心が痛んだ。

俺が場所を変えたい何よりの理由は、ここが海値と待ち合わせしている待ち合わせの場所だから。

涙羽と海値、2人に見つめられているような気がして、後ろめたい気分になった。

後ろめたい？

そうだよ俺は、別に二股をかけているわけじゃない。これは織姫と彦星になったからのこと。

孤独なる涙羽を助けるために

「……………」

助けるために…。

運命の1日。

この日だけは見慣れた建物の中も違って見える。

漂う空気。どのエリアにもある休憩所のソファ。同じメーカーの自販機。踏みしめる床ですら、まるで初めて中に入った時のような感覚になる。

揺西は涙羽の歩調に合わせてゆっくりとエネルギー施設内を進む。再会后、ビルを出ても構わないが治安の問題で涙羽にもしもの事がないように、毎年、今年も例外なく施設内で過ごした。

「涙羽、大丈夫？疲れない？」

ほとんど体を動かしていない涙羽にとって、何でもない動作すら大変な事で歩行も重労働だった。

涙羽がいつでも座れるように空の車椅子を押しているが、彼女は首を横に振る。

「大丈夫」



その純粹なる笑みや動作に疲労といったものを感じ取ることはできないが、彼女は拒否をした事がなく揺西は心配でならない。

拒否できないからこそ、ガラスの器に、それも永遠に近い時間をこの町のために閉じ込められなければならない。

「本当に大丈夫？」

ただ単に俺が心配になりすぎているだけなのだろうか。

ガラスのように、水槽から取り出した魚を扱うかのように接してしまうのは仕方ないと思う。

「大丈夫」

まっすぐに帰す瞳は強い目をしていた。

彼女は、この町のエネルギーを制御しているのだから。

「涙羽、どこに行きたい？」

「世界が見られる所」

毎年、同じ事を聞いて、毎年、同じ言葉が返ってくる。

涙羽が言う『世界が見られる所』というのは、世界中のあらゆる映像を納めたドキュメンタリーもののDVDを見ることを指していた。

涙羽のリクエストに答えるため、揺西は人がDVDが見られなおかつ誰も入ってこない会議室に向かい。小さな部屋から世界旅行を楽しんだ。

俺にとつては見飽きてしまった映像も涙羽には斬新なものが集まった宝箱にちがいないだろう。

とはいえ運命の日が毎年恒例のDVD観賞で終わってしまうのは何か悲しいものがある。

今年は今日一日だけなのだから、涙羽が喜んでもらうような特別な事をしたい。

「涙羽。屋上にいかないかい？空を見よう」

DVDを見終わってから提案してみたが口にした事を後悔した。特別ななんてほど遠い。これじゃあ去年と変わらないじゃないか。

いや、もつとつまらなくなってしまう。

そう反論する声が頭の中で響いたが、それに反論するよりも早く涙羽が答えてくれた。

「どこでもいい。揺西がいてくれるんなら、どこにでも」

屋上に出るには階段を使わなければならなかった。

たかが数十段とはいえ、車椅子の涙羽にとってはされど数十段で、揺西は申し訳なさそうな表情をとった。

「ここを上げれば空が見えるんだね」

諦めるか、頑張ってくれるか問おうとした揺西の口よりも早く、涙羽は上り始めた。

涙羽の健気な姿を見て、揺西は手助けするために先に上がる。歩きなれない足で上がるには、かなりの時間を有した。それでも涙羽は一步一步懸命に上がっていく。

「涙羽、大丈夫？少し休もうか」

揺西の言葉に涙羽はにこっと笑ったが足を止めようとはしなかった。

涙羽は決して首を横に振らない。

揺西は天井に張り付いている蛍光灯をいまましく見つめた。

どうして、この蛍光灯は暗いんだ？足元が見にくくて涙羽が上がりづらいじゃないか。

照明も照明だが階段も階段だ。最新の町にあるエネルギー施設なのに、どうして手すりもないんだ？

涙羽になにもできない苛立ちを建物の不満にぶつける揺西だが、ぶつけたところで改善されるわけではなく、揺西は確実に減っていく段に視線を移した。

数がゼロになった。

最後の一段を上り終えたのを確認すると揺西は嬉々として踊り場奥にある扉のノブに手をかけた。

『カタカタ』と、回らない事をドアノブが音で答え、揺西はさっ

と表情を変える。

「どうしたの？」

「鍵がかかっている…。」

「ちよっと待っていて、今、警備員室に行って鍵をもらってくるよ」「  
今までの苦労を水の泡にしたくない一心で揺西は涙羽に背を向け  
て駆け下り始める。」

「……………」

後ろに立っている涙羽の悲しそうな表情は揺西の視界に入らな  
かった。

「……………」

しかし、揺西の足は止まり、振り返る。

遠く離れていても呼び出せる声が揺西の頭に届いたのだから。

「私も下りる。1人は嫌。揺西と一緒に行く」

「大丈夫だよ、すぐに戻ってくるから。それに涙羽、下りたら、ま  
た上がらないと」

「……………」

涙羽は何も言わず了承の笑顔を作った。悲しそうな目で。

「うん、そうだね。私、待っているね」

涙羽は否定することができない。

それは長い時間、あの狭い空間に閉じ込められていた環境のせい  
だ。

自分のワガママ一つで、この町に影響を与えて与えてしまう。そ  
の考えが圧迫となって涙羽を押しつぶしている。

この町のせいで涙羽は、自由を唱える力を奪われてしまった。

涙羽が唯一、唱えることを許された呪文は織姫に選ばれた俺を呼  
ぶものだけ。

涙羽の一つだけのワガママ。それに応えてあげたい。それが涙羽  
の生きる力でもあるのだから。

「涙羽…ごめんね」

謝罪を伝えた揺西は、階段を一段一段上がって涙羽のところに戻

った。

「……………」  
ほっとした涙羽から2本のスジが頬を伝ってゆく。

「涙羽を1人にはしないから」  
たどり着いた揺西は、今にも泣き出しそうな涙羽の背中に腕をまわし、軽く包み込んだ。

別に物を取りに行くなど、他の者にとって大した事ではないだろう。

しかし涙羽にとってそれ以上のものはない。人のいない特別な環境にいた涙羽には、見知らぬ場所に取り残される事を恐れていた。それに離れてしまうのが他ならぬ揺西こと、織姫なのだから。

「……………」  
涙羽の僅かなぬくもりが腕に伝わってくる中、俺の方は汗ばんできた。

今は真夏。空調管理された建物とはいえ屋上に上がる階段まで設置されていない。

「……………」  
涙羽の後ろに忌々しい扉が見えた。ドアの上の方にガラスが組み込まれていて、薄灰色の空を見ることができた。

「……………」  
何を考えているんだろう、俺は

この日はエネルギーが停止しているんだから都市を覆っているのはドーム天井しか見えないっていうのに。

「……………」  
涙羽は青い空を見ることが出来ない。

その言葉に気づいた時、儚げで弱々しい涙羽の存在に気づいた。

「涙羽、ずっと側にいるよ」

涙羽のためになりたい。彼女が望むものは何でも叶えてやりたい。

## 日のない町と影

海値は階段前にある車椅子を見つめていた。

この先に揺西と涙羽がいる。

「……………」  
涙羽にとって年に一度だけのイベント。

海値は彼女が人間なのを知っている。知っているからこそ、仕方がないと思い、揺西を取られる嫉妬心も生まれる。

「……………」  
…変なの。毎日、揺西の顔を見ているのに。

ずっと一緒じゃない時間だってあるのに。

どうして、こんなに辛いんだろう。

今日1日揺西に会えないのはわかってる。

ここにいっても意味がないのもわかっていた。わかっているが足が動かない。

「……………」  
永遠に続くと思われた海値の呪縛を解いてくれたのは、後方から聞こえてきた足音だった。

人の存在に気づいた海値は野生動物のように階段を離れ、小走りで離れた。

自力発電設備があるとはいえ、エネルギーのメイン施設を重視に配分されており、エレベーターは一部しか使えない。

海値は非常階段を2階まで降りて行く。

階段には踊り場がある所に蛍光灯があり真っ暗ではないが、省エネシステムが作動しているため、半階ちょっと降りるたびに上階の電気が消えてゆく。

海値は足を止めて上階を見上げたが、こみあがってくる負の感情

を味わいたくないため首を振って足を下段に移した。

これからどこに行こうが考えるため、手すりの隙間から下階に向けてと2、3階下あたりに明かりが灯っていた。誰かがいるらしい好奇心か同情の目しか向けられない、1日。誰にも会いたくない海値は別の進路を決めることにした。

「みつちゃん」

しかし、偶然か、鋭い勘によって見上げた知人は手を振っている。「戸立：さん」

一番あいたくない知人に海値は顔を曇らせたが、すぐに戻し階段を降り始めた。

優れた良い人なのだが、揺西との辛い関係を同情し、別れさせようと話を進める。

いくら怒ろうが、泣きそうな顔をして、この人は平然としていた。

「あなたも大変ね。毎年毎年」

身構えていた海値にとって嫌な言葉だが、長い年月を経て免疫ができていたので表情を変えることなく答える。

「この町のためですから」

視線を逸らしたものの、戸立の口は閉じてくれない。

「それはそうと田崎さん、しらない？」

少し身構えていた海値には気の抜ける質問だった。

「田崎さんですか？いえ、お祭りの初日に見かけたつきりですが」

「困ったわねえ…居荒さんから電話があっただけけれども携帯が繋がらないのよ」

「携帯…もしかして電源消しっぱなし…」

海値は田崎のサボっていた事を言いそうになり、慌てて別の言葉を探した。

「きつと…（人工都市から見ても）外の携帯は電波が繋がらないか…電池が切れたんでしょうね」

「そうねえ…もし、見つけたら連絡するように伝えてくれない？」

「はい」

「それと…居荒さんから、もう一つ伝言があつてね。これも伝えてくれないかしら？」

「いいですよ」

「新作のプロレス技と18番の刑。どちらかを選べ」  
「……………」

「どちらも嫌です。新しい技が何が出るかわからないし。技が下手に外れれば命の保障もない。かといって18番は3日3晩うなされるし…」

尋ね人は意外と早く見つかった。

…というより

「それはそうと、何をしていたんですか？」

田崎は玄関ロビー窓側に置かれていた観葉植物の隅にうずくまっていた…。

偶然、そこを通り、視線をそこに移らなかつたら永遠に見つけ出す事などなかつただろう。

「もちろん、小一さんに見つからないように物の影に潜みながら移動し、今は休んでました」

「田崎さん。小一君は外夢のクローンだけあつて今日は眠り続けていますよ」

… … …  
「それって、今日1日、私の行動は意味がなかつた…という事ですね」

海値はどう肯定したら傷つかないか悩んでしまった。

「でも、まあ。今後のためを考えれば、いい練習になったんじゃないでしょうか」

「…。そうですね」

省エネに加え、蛍光灯の光を30パーセントダウンさせた空間は、いつもより灰色に包まれていた。

人がほとんど活動しない旧暦7月7日となれば、2人の放つ声が空間いっぱい広がってゆくが、あまりにも広いロビーでは途中で消えてしまう。

「それはそうと田崎さん。居荒さんに連絡しないでいいんですか？ 灰色に包まれるのは空間だけじゃないようだ。」

「……………」

祭りの日以来、電源を切っていた田崎の顔は、灰色を通り越して闇色に包まれていた。

「だ、大丈夫ですよ。今はお盆休みなんですから、休みが終わる頃には嫌なことも忘れていきますよ」

「海値さん。それフォローになってません…でも、そうですね。海値さんの言うとおりです」

2人は、先の暗い未来を忘れるために空を見上げた。

しかし、覆われた人工都市の薄灰色の覆いが目に入るだけで、心が癒されることはない。

2人は外にいた。

電力を停止した『外夢の町』は時が止まった明け方というべきである。

日が昇る前のうつすらとした闇夜色が町を包んでいた。辺りが見えない心配はないが、たまに見かける人を見なければ廃墟にも見えしてしまう。

「不思議ですね。一日前はあんなに華やかだったのに」

「そうですね」

「それはそうと、海値さん。いいんですか？ 私の危険な探索に付き合ってくれるなんて」

「興味はあつたんです、電力停止した町中を。でも、治安が悪いを恐れていたのです」

2人は安全を考えて中央エリア付近の大きな通りを、初めて訪れた観光客のように辺りをキョロキョロしながら進む。



灰色のドームが覆う、外とはいえない空間。

治安の悪すぎると言われ続けた旧暦イベントの外。

幼い海値の願望を家族を受け入れてくれたことはなく、少し大人に近づいた今は、揺西と行動できないので、叶わないものだと言っていた。

とはいえ海値は油断せず、絶えず細い道路や建物の影に人が潜んでいないか視線を移動させる。

もし、運悪く、治安を悪くしている者たちが現れたら、田崎では勝ち目がないという不安が心の奥底に潜んでいるのは、田崎の頼りない面を見ているので仕方ないだろう…。

「ここは…作られた町なんですね」

『空』というドーム天井を見上げながら海値は言葉を漏らした。

「何も知らずに見上げていた青空も、作られていたんですね」

生まれた時から人工都市に住んでいた海値にとって、この日、初めて『それ』に信じる事ができた。

本物と変わらない。ただそれが偽物であることだけ。

「それと外夢たちが作っている」

外夢たち。それは涙羽を指しており、海値が彼女を無意識に意識していることも指していた。

「辛いですか」

それを察した田崎は、口にしたが、聞かれた海値はきょとんとしていた。

「何がですか？」

とはいえ、胸のうちを明かすほどの仲ではなく。聞かれた海値にとっても、まさかその事を聞かれているとも気づいていないようだ。

「え、いえ…歩きっぱなしだから…大丈夫かなあと思いました」

「まだ全然だめですよ」

「そうですね」

2人は当てもなく歩いた。灰色の空が覆う灰色の町を。

治安が悪いという噂話を信じてか、外を歩く者はほとんどいない。店はシャッターを下ろし、住宅は防犯か長期留守のため雨戸を閉めている。

「何か廃墟みたいですね…すみません。海値さんの町なのに、こんなことを言ってしまった」

ぼろりと出た言葉に気づき、田崎はそのまま謝罪した。

「私も思っていましたよ。それにしても電気があるとないとじゃ、こんなにも違うものなんですね」

田崎は足を止めて前方にあった自動販売機にコインを入れた。

百円玉が落ちてくる音にきづいてから、田崎は自動販売機にも電気が流れていない事を思い出した。

「言っている側から、馬鹿な事をしてしまいましたよ」

## 灰色

田崎は自動販売機のボタンを押してスポーツドリンクを取り出し海値に渡した。

「ありがとうございます」

電気のない蒸し暑い外とは違い、塔の中は制御されていると思えないほど快適なものだった。

「馬鹿なのは、私の方かもしれません」

エネルギー施設に到着する頃には、海値の表情は人工空の様に曇っていた。

「え？」

田崎が自分の分を自販機で購入していた時の発言だった。

「……………」  
海値は何も言わず歩きだした。

『今のは、揺西君との事…だったんでしょうね』

独り言にでも敬語をやめない田崎は、缶の蓋を開けて潤いを体内に流す。

「辛いですか？」

その時も田崎は同じ解釈をして、海値に尋ねた。

田崎が質問に使った言葉は2回目であるが、海値は質問の意味を理解した。

「辛くないと言ったら嘘になります…」

「そうですね。2人はつきあっているのですから」

「……………」

当たり前の事を言う田崎を見る海値の目は、複雑な色をしていた。

「私、本当に揺西と恋人になっているのかな」

唐突な言葉に田崎は視線を向けてしまったが、うつむいて髪がさらりと流れるように頬より前に揺れて海値の心情を隠してしまった。

「時々、不安になるんです。今、揺西と一緒にいられるんだけれど本当に私は楽しいのか」

「それは幼なじみだからでしょう。海値さんと揺西君は長い間一緒にいるのですから。いることが当たり前になって…。」

もしかしたら『嬉しい』に慣れてしまったんじゃないでしょうか「嬉しいが慣れた…ですか」

田崎の変わった言葉に対して海値はくすりと笑ったが、その言葉に納得する様子は見当たらない。

「……………」

海値は何も言わずに数歩あるき窓外から見える灰色の空を見上げた。

「やっぱり、あの人の言うとおりなのかな」

「あの人って？」

「戸立さんです」

返答する海値の視線は下がっていた。

「戸立さんはね、彦星、涙羽がいるから。それに反発しているって意地になって、つきあっているフリをしているって」

田崎は何も言わず、海値の話に耳を傾けた…というより言葉を返せないでいた。

「無理に付き合っているって言われた時、反発したけれど。冷静に考えれば…そうかもしれない気がする。」

私も揺西も恋人になるため、恋人のフリをして、恋人がする事を真似しているだけじゃないのか…って

「……………」

田崎は何も言えない。できることならば、何が『良い言葉』を言いたかった。

「恋愛ってなんだろう…ドキドキする事？」

空を見上げ、海値は言葉を吐き続けた。

「好きになるってどういう事なのかな」

灰色の空を見上げる海値の顔は、モノクロの様に見えた。薄灰色

と白の2色だけでできた、淡く消えてしまいそうな気配を漂わせて。「少し。距離をおいてみてはどうでしょうか？」

弱々しい海値を見続けていた田崎は、ようやく助言を口にした。

「……………」  
田崎の声に気づいた海値は、田崎の存在を思い出したかのように振り向いた。

「……………」  
海値は田崎の助言が耳に届き、理解してから表情をあらわにした。

「海値：さん」  
淡く消えそうな表情からニスジの涙が流れた。

「…あれ？涙が…どうしちゃったんでしょね、私たら」  
無意識によるものだったらしく、手に触れて慌てました。

「それよりも先に『女の子を泣かしてしまった』という事に慌てていた田崎だが、海値の慌てぶりを見て少しだけ冷静を取り戻した。

それは一ヶ月前まで彼女がいた経験があるからなのか、それとも『自分が（男として）しっかりしなければならぬ』を思えたからかは定かではないが。

田崎はズボンのポケットに手を入れてハンカチを取り出した。

海値は小さな声で礼を言ってから、涙を吸収させる。

「揺西君に恋をしている証拠ですね」

海値はうなづいた。

「……………」  
回想を終えた田崎は、ポケットからハンカチを取り出して汗を拭こうとしたが、洗って返す事になっていたので、手は空洞をつかむだけであった。

「……………」  
田崎は息を吐き出し、あてがわれた宿泊部屋へ戻ることにした。  
「ぶもあ」

…はずだった。

田崎は耳を疑ったが、独特の鳴き声の後に続いて聞こえてきた床にあたる固い音は、空耳にすることはできなかった。

どっと吹き出てくる汗をほったらかし『みみ海値さんは、今日は眠っているといったのに…』と思いながら近づいてくる音に耳をすましたが、それらしい音は消えていた。

「あ…あれ？」

「ぶもっ」

「ひいっ」

足を止めるほど間近づいていた事を知り、田崎は三流コメディアンのような驚くポーズをとってから、慌てて背を壁にくっつけた。

「こここ小一さん。どとどどうして起きていますか？」

人間後を理解できないのはわかっていたが、田崎は口にするしかなかった。

田崎は左右を見渡し誰か（特に海値）人はいないか探したが、しんと静まり返った空間は田崎に汗をかかせた。

「まだ、起きるには時間がある。だが、お前に会うため、無理に起きた」

「……………」

田崎は自分の耳を疑い、目を疑った。

目の前にいる灰色の長毛牛、小一の口が開くたびに人間の言葉が放たれたのだから。

「驚いたか」

目を見開いたまま動けない田崎に小一は嘲笑の声をあげた。

「私の素。外夢には噂がある。外夢は素人間であったと」

「そ、それは聞いたことがあります。ででも、噂だと」

「ならば、なぜ、我はしゃべれる？」

小一の顔が近づいた。

逃げ場のない田崎は、短く小さな悲鳴をあげ、支える力を失い座り込む。

地を這うような低い生物の声が田崎に更なる不安を与えた。

「とはいえ、これは噂話だ。我がしゃべった事を他の者に言ったところで、誰も信じることはない。お前の頭を疑うだけだ」

近づいた顔が離れた時、遠くの方から物音と人の声が聞こえた。

「誰か来てくれ、外夢小一が脱走して、また、例の人を襲おうとしている」

通りすがりの職員が見つ付けてくれたらしいが仲間を呼びに離れてしまった。

「ちっ。気づかれなければ、一思いにやるつもりだったが」

「ひっ。」

でも、なぜ、どうして…私を襲おうとするのですか？」

「消したいからだ」

小一はストレートに答えてから、さらに続ける。

「お前は気に入らない。大好きな海値を奪うからだ」

「奪うからって、それは私よりも揺西君の方じゃないですか」

笑い声が響いた。

「揺西。あれは手にできない。海値を奪うことができない。海値を奪ったフリをしているだけ」

「そんな…でも、私は、私の方は」

「お前を見るだけで、気配を感じるだけで。海値が奪われる嫌悪感が生まれる」

小一は遠くから響き渡ってくる音に気づき、耳をその方向に傾けた。

「覚悟しておけ。海値を奪おうとする前に、お前の命を奪う」

慌しくかけつける足音が響く中、小一は予告し、それから機嫌の悪い声で『ぶもっ』と鳴いた。

田崎は何も言わず身動き一つすることなく、小一と職員たちが慌しく消えていくのを目にする事しかできなかった。

## 祭りの後

祭りの時間は終わった。

賑やかな七夕祭りも。織姫と彦星年に1度だけ会えるイベントもすべて

ついでに学生たちの楽園期間、夏休みも終了し、季節は秋に向かう。

「……………」

とはいえ、人工の太陽（ドーム内の映像）はようしやなく照らす。人々はクーラーが効いた部屋へ非難する。

外を歩く私たちは日影を求めながら、手うちわで気休めの風を送る。

私たちは自由になった。

年に1度だけのイベントを終えた涙羽は、来年の七夕が近づくまで大人しくなる。たまに声を放つ事はあるけれども、ほとんどないと言ってもよかった。

「……………」

祭りの日、不安定になったけれども、彼女の存在が消えて開放された私たちは互いを想う力が強くなった。

それも涙羽という反動によるものなんだろう。

今は揺西と一緒にいられるからどうでもよかった。ひどい事かもしれない。

罪悪感を感じている。

でも…

「どうした海値？」

唇を離し顔が見えるようになった揺西は、僅かな変化に気づいたが海値は首を振った。



「何でもないよ。

…。揺西？」

「……呼んでる」

空を見上げ、揺西は確かに言った。

中央エリアのエネルギー施設の塔にたどり着いたとき、人々の視線を感じた。

祭りの後に私たちがここにいる事は去年まで一度もありえない事だったから。

エレベーターから地下のコントロールルームにたどり着いた時、私たちに向ける視線は明らかに違っていた。

「揺西君、海値ちゃん」

戸立さんも驚きと不安げに私たちを見つめる。

何も言わず揺西が背を向けて歩き出した。揺西の表情も空間感染していた。

「いよう、青春少女。また、会うとはな」

エレベーターの扉が開いた先にある休憩室のソファーにどっかりと座る居荒がいた。

「どうも……」

混乱する頭を冷やすためにも1人でいたかったが、その場所は2人の待ち合わせ場所であるので同じ空間にいるしかなかった。

居荒の左前で時間を潰さなければならなくなった海値は、涙羽の異変に不安を浮かべていたが、休みなく聞こえるキーボードを叩く音に視線を向けた。

三流魔王やら、後輩田崎に技をかけて遊ぶ居荒だが、この日はまったく違った。

ノートパソコンに向ける視線は鋭く、笑みのない真顔を海値は初めて見た。

『やっぱり社会人なんだなあ……』と想っている間に、視線に気が

付いた『未来の会社を背負う営業マン(?)』が顔をあげた。

「悪いな、忙しくて構ってられん」

「いえ、お構いなく」

カタカタカタカタと続く音に海値は視線を床に落としたが、宣言したばかりの男が自ら破った。

「俺の口からは何もいえないが。覚悟しておいた方がいいな」

「え…。覚悟つて、何をですか？どうしてですか？」

モニター画面を見ながらの言葉に海値は反論したが、居荒の視線は変わらなかった。

「細かい事は彼女に聞いてくれ」

「彼女って誰ですか？」

「戸立さんだ」

その後は宣言どおりカタカタカタカタという音だけが響いた。「何だ、聞きに行かないのか？」

てつきり行動するために立ち上がると予想していた居荒は、身動き一つしない海値によく視線を向ける。

「戸立さん、今は制御室にいるから会えません。外夢に関しては無関係者になるから、戸立さんのいる制御室に入ることはできないんです」

『無関係者』という言葉が居荒の眉を動かした。

祭りでパレードに参加させ、アンドロイドのモデルになったといえ『それとこれは別』という、エネルギー施設の塔にいる職員たちの冷たい態度にやりきれないものを感じたからだろう。

いくら揺西と共にここを訪れ、巻き込まれているにもかかわらず。

『無関係者』か』

居荒は心の中でつぶやいて辺りを見回した。人の気配がないか確かめてから低く、小さな声で海値に話しかけた。

「俺とみっちゃんの仲だから、特別に教えてあげよう」

海値は居荒の言葉につっこみをいれず、居荒に『お願いします。』

教えてください』という表情をむけた。

「だが、条件が2つある」

「条件、ですか」

「ああ。これは、まだあまりにも秘密になっているから絶対、口外しないでくれ。誰にもな。恋人も戸立女史。俺、自身にも」

聞き返したり、この話題を出さないでくれと表していた。

「でも、戸立さんは知っているんでしょう？」

「だが、この情報をみっちゃんは知らない事になっている。恋人か戸立女史から話を聞かない限り、君がこの情報を耳にすることはないだろう。」

これはみっちゃんの先行きを案じてのためだけに流すことにした俺の独断だから、しゃべった事がバレれば首が飛ぶだけでは済まされないだろう。なんせ、命の重さなどわからん連中だからな」

後半の声はあまりにも低すぎて、海値の耳には聞き取れなかった。

最初は居荒の冗談かと思ったが、笑みを見せる気配はない。

「……。誰にも言いません」

「もう一つの条件はみっちゃん次第だな」

条件は海値の情報公開：何のことはない。携帯のメールアドレスを教えるだけであった。

どこで誰が聞いているのかわからないからという理由での情報公開で、居荒はメールで『覚悟しなければならぬ理由』を教えてください。

「件名」覚悟の理由

「本文」

エネルギーモンスター外夢が老朽化している。

都市の者たちがエネルギーを使いすぎて、外夢はあと何年もつかわからない。

かしこい みっちゃんならば『覚悟する理由』がわかるよな。

「…はい」  
携帯をしまいながら海値は、目の前にいる送り主に返事をした。  
居荒は何も反応せず、キーボードを打ち続けてくれるので、海値はうつむき考えをめぐらせる。

外夢がエネルギーを作らなければ新しいエネルギーモンスター小一君と私を素に作り出した（今は製作中）アンドロイドに代わる。代わる。

そうしたら元彦星になる涙羽はどうなるの？彼女が自由になったら揺西は？

「……………」  
思考が解除できたのは、エスカレーターの扉が開いたからであった。

「田崎、何やっているんだよ」

同時に視線を向けた居荒は鋭く言い放った。

「すみません」

先輩の鋭い目と声は、田崎の精神も簡単に感染させ、飼い主に叱られた犬のようにびくんとふるわせた。

カタカタカタカタとキーボードを叩く音だけが部屋を支配する。

「まあ、社会人なんだから色々あるんじゃない」

2人の様子を聞いた揺西は興味なく答えた。

「けどさあ、気まずかったわよ」

「場所を変えれば良かったんじゃないか。メール送ればいいんだし……………」  
場所、変えなくなかった」

海値の呟くような返答が消えると、2人から言葉が消えた。

社会人たちの話題で本題を逸らしていたが、重い空気が2人を覆う。

「……………」

2人ともわかっていた。

これから先に押し寄せてくる不安について。

「揺西…」

不安げに唱えた言葉が空しく消えていく。

揺西は返答の代わりに海値の手をつないだ。

触れ合った手から互いの不安が伝わってくるよう気がして、相手の体温すら感じ取れない。

不安な帰り道、2人の口は閉ざされたまま到着する…と、思っていた、揺西は。

「ねえ、揺西。これからどうなるの？」

居荒から『覚悟』という情報を知った海値は、黙っているわけにはいかなかった。

揺西が外夢の老朽化を知っているのか、わからず聞けない今、それ以上のことは言えない。

だから『大丈夫だよ』と、髪をくしゃくしゃと撫でて抱き寄せられても、不安は変わらない。

「外夢が疲れているから、涙羽の目が覚めやすんだってさ。外夢が休息すると涙羽は自由になって『声』を放つのは知っているんだろ」

「そっなんだ」

外夢は旧暦7月7日以外でも『仮眠』は取る。仮眠状態に入った時に涙羽が『声』を放つことができた。

もちろん仮眠に入るとエネルギー放出も通常の8割に落ちるが、大きな支障はない。

「戸立さんは一時的だと言っているから」

「あの人は同じ手を使うよね」と、海値は頭の中だけで言葉を放った。

涙羽をバレル直前までアンドロイドだといひ続けてきた者にとって、今回も同じ手を使うのだろう。

「……」

大丈夫だよ、揺西。

もしさ、もし、涙羽が開放される事になったら…揺西はどうするの？」

「心配するな」

くしゃくしゃに海値の髪をなでる揺西の視線は海値から離れていった。

## 真実と噂話

「なんてピュアな子たちでしょう」

戸立はカタカタカタカタとなり続けるキーボードを打ち続けながら、その者は揺西と海値について話していた。

「幼なじみなのに、彼が彦星の恋人として選ばれたばかりに純粹に恋愛ができない。

それでも彼らは、懸命に恋愛ごっこをする」

「こっけいだと、言っているようにしか思えませんが、あなたの発言は」

エネルギー制御管理室

部屋に招き入れられた居荒は数台のパソコンらしき機械と長い机が置かれただけの狭い部屋を見回し、それから左側にはめ込まれた窓から見える、広大な施設を見下ろした。

都市の心臓エネルギーを発電する彦星の牛が飼われている場所。

外夢を包み込んだ灰色の容器が居荒の視線にある。

「ここからでも中は見られないんですね」

「もちろん。見えたつておもしろくないわよ。」

そうそう、居荒さん」

リズム感のあるキーボード音が止み、居荒を見上げる。

「ようこそ、暗黒エリアへ」

皮肉を込めたあいさつをすませると、再び指から生まれる雑音が始まった。

「ここまで足を踏み入れれば、立派な共犯者つてわけか」

「ええ」

止まることなく続く音の中で短い即答が終わり、雑音だけが2人を覆う。

それが止んだのは5分くらいの時が流れた後。

「彼女の存在がなければ、2人は幼なじみ以上にはならなかったわ」  
『彼女』という言葉聞き入れた居荒の視線は、自然と窓に向かうがここからでは涙羽のいる容器はほとんどみえない。

「制御管理室なのに見えないんですね」

「彼女の情報はここ（戸立が使っているパソコン）に来るから窓から見る必要はないわ」

「そうですね」

見えなくても居荒は窓外を眺めた。

織姫は彦星涙羽が自ら選んだらしく、彦星の頭に直接を送ることができらしい。

それ故、彦星、涙羽について気になる居荒であるが、それを知るのは困難だと判断できた。

謎めいた都市『外夢の町』その隠されたエリアに居荒は足を踏み入れたばかりであった。

彼はこの閉ざされた都市の闇がいかに大きく、いかに深い霧に包まれているのか嫌でもわかる。

余計に踏み込めば、ミイラ取りがミイラになりかねない事も。

居荒はうづく好奇心を抑えて、戸立の言葉に反論するだけにした。

「恋愛っていうのは、当事者同士しかわからないものがある。第三者の予測通りにならないもんですよ」

「そうかしら」

「それよりも戸立さん」

戸立のキーボード音が止んだのは、居荒の声が地を這うような低いものに変わったからだろう。

「明日、例の物が届きます。開発部の素宇野（そつの）どうやらまだ一族が

いるようだ）からも説明があると思いますが。使う使わないのは、

あなた方次第です」

「使うわ。使わなければ、この町は滅んでしまう。」

そのために居荒さんも暗闇の地に放り込まれたんだし」

「……………」



戸立は、左斜め後ろにいる居荒の視線を感じ取ることができた。

『ふん』と声を出さず居荒が心の中で言葉を放った。

『まさか、一介の営業マンがこんな事をやるとはな。』

田崎の補佐をしるといわれた時、引っかかってたんだよ。田崎のレベルじゃあ、開拓は無理だし。第一、ここで都市の無関係者たちに売り込める安全な物なんてない』

報告を終えた居荒は制御管理室を離れ、エネルギー施設の塔を後にした。

再び機能を取り戻した人工の空は、いくつもの雲映像を作り出している。

夏に見られた入道雲より高いところに位置するいわし雲の映像を見て居荒は秋に気づいたが、空しいものがあつた。

本物と変わらなくても本物ではない。

見れば見るほど滑稽という言葉が当てはまる。

「作られた空なんか…テレビ番組のセットと変わらん。あれも裏はハリボテだ」

塔を出てしばらく進めば人通りが多くなり、塔と比べれば知人に会う確立が減る。

気を緩めた居荒は懐をさぐりタバコを取り出そうとしたが、都市内全面禁煙につき入り口で没収されたのを思いだした。

「ちっ」

口の寂しさを紛らわすため、目に入ったコンビニに入り込んだ。

外の町でも見られる大手コンビニエンスストア。売り物も構造も違いはない。

『作られているが本物か』

居荒の足はレジ近くのガム売り場ではなく、窓側にある雑誌コーナーに視線を向けながら通り過ぎる…つもりだったが見出しに気になる週刊誌を手に取り、本をめくる。

「……………」

たいした内容ではなく本棚に戻した。

『田崎をダシに使ったってことだ。』

共犯者として俺を引きずり込むために』

居荒はくだらなかつた週刊誌を睨んだ。それが会社の者であるかのように。

『どおりで去年まで、不参加だった社長が祭りに顔を出してきたわけだ』

コンビニを出た居荒は、回想を始めた。

「第2の外夢を造るため、ぜひ、君の力を借りたい」

祭りが一息ついた後で居荒は上司たちに呼ばれた。田崎が公園で平和にサボれたのは、こういう背景があったからであった。

塔で借りた会議室内に響き渡る声は、しばらく居荒の耳に残っていた。

「第2の外夢とは…小一とかいうクローンの事ですか？」

「何を言っているんだね、居荒君。小一が使えるならば、君の力などいらないだろうが」

「営業課向きの仕事ではないただ、広報部長。お前の部署だつてそうだろうが」

上司か親の機嫌を取りたがる息子をたしなめ、社長は退出を命じた。

反論したが命令は変わらず、居荒に『いいか、くれぐれも粗相のないように』と上から目線で言い放つてからドアを閉めた。

『粗相だと言える礼儀ではないだろうに』を言葉を吐いてから本題に切り替わった。

「居荒君。外夢のクローンでは間に合わないのだ」

「……………」

「我々が立てた計画では外夢小一が十分な成長を遂げるまで外夢で足りるようになっていた。」

しかし、都市の者たちがあまりにもエネルギーを使うから外夢の老化が早まってしまった」

居荒は相槌をうち、前方を左右に歩く老人をうやうやしく見つめるしかできなかった。

「だから、我々は新しいエネルギーモンスターを供給せねばならない」

歩いてきた足がぴたりと止まった。

「新しいモンスターだ、居荒君。法に触れた犯罪をな」

居荒は社長の目に含まれる異様な気配を感じ取った。

「我々は、これを と呼ぶ事にした。」

この計画に居荒君の力を借りたい」

淡々と続ける話に流されてしまう事に気づき、慌てて需要部分に戻した。

「待ってください、社長。法に触れるとは、何のことですか？」

居荒の言葉に社長の目がつり上がったが、何も知らない事を思い出し、穏やかな顔に戻した。

「居荒君。」

噂話は本当なんだ」

「噂…か」

回想を終えた居荒の目がつり上がる。

「話の種に過ぎない」流ネタかと思っていたのに…。

あれが人間だと」

居荒はエネルギーモンスターが入っているメタル色の巨大容器を思い出した。隣の彦星と違い、シルエツトすら見えないモンスターに得体のしれない不気味さを感じた。

「あの中に人間がいるだと」

ゴミ箱にガムを吹き飛ばしてから、自分が公園にいる事を思い出した。

「共犯者になれ、か。」

市長をまるめこめだと？」

「ええ」

居荒が声を放ったのは公園に1人しかいない事を知った上での事だった。

『後をつけてきたのか？』と、問いたかったが塔にいたはずの戸立の手にはスーパリーの袋が握られていた。どうやら偶然らしい。

「本当は一族だけの秘密にしたかったのよ。」

でも、あそこは研究が一流すぎて、口まで頭がまわらない」

「だから市長に詐欺まがいな違法、犯罪を納得させなければならぬのか」

「そうよ」

さらりと言う戸立に『…。あんたも怖いね』と言葉を漏らし、汚れた言葉を放った口内を殺菌するかのように新しいガムを放り込んだ。

「知ってる？居荒さん。その有名な噂話には…さらに細かい設定ができていてね。」

元モンスターだった男は、奥さんと愛人を手にかけてたんですって。でも、一命を取り戻した科学者の奥さんが男を研究所に送り込んで改良。

働かせられる哀れな旦那をほくそ笑みながら管理しているんですって」

見つめられた戸立に感情の変化はみられなかった。

「もちろん、根拠のない噂よ。」

そもそも外夢は、ただのモンスターにすぎないのだから」

根拠のない噂話に戻した事に居荒は『冗談』という事した。

「……………。そうだな」

噂話にしてはキツイものだが…。

## つないだ手

引き金は、揺西が机を叩いた時だろう。

「ふざけるなつ。俺たちの恋愛に邪魔をする権利なんてないんだよ」  
日曜日の午後、戸立さんに呼ばれた。揺西だけではなく私まで。

「……………」

机を叩いた手は、今、私の手を握り、引っ張っている。

前方を歩く揺西は、何もしゃべろうとはしない。今、何を言っても言葉は返ってこないだろう。

まだ消えない怒りをあらわにして、私たちは黙々と歩き続けている。

「単刀直入に言うわ。」

彦星、涙羽の引退にともない。あなた達には別れてほしいの」

数時間前に言った戸立さんの話は、予測はできても衝撃が強くて、何かの弾みで頭の中に再生されてしまう。

「俺たちは絶対別れないからな」

再度、机を叩きつけ、私たちはエネルギー施設の塔を出た。

揺西は握った手を離すことはなく、どんどん歩き続ける。

中央エリアを離れ、商業エリアを進む間も揺西は口を閉ざしたまま。

しばらく進んでから揺西は呟くように言った。

「町を出る」

揺西の宣言は、繋がっている私にも言っていて、手を離せば揺西に『反対』を意味する。

「……………」  
「この手は離さない。」

でも、町を出ることに困惑し、思い直してほしいと言いたい。  
でも、この手を離すことはできなかった。

繋いだ手は、揺西と一緒にいられる全ての『繋がり』に見えた。  
今、手を離したら二度と繋がらないのではないかという不安が、私  
から行動力を奪ってしまった。

「……………」  
私はただ歩いていく。

揺西に引つ張られるままに。町の外へ。

商業エリアから北へ。

いつもは西に進んで住宅エリアに帰っていく。

商業エリア北はオフィスエリアになっていて、スーツを着た大人  
たちの視線を感じた。

「……………」  
こんな事にならない限り、足を踏み入れる事はないので物珍しさ  
から周りをキョロキョロしてしてたけれど、すぐに揺西の背中に戻  
した。

『宣言』以来、何も言わず歩き続ける揺西の背中から『怒り』は  
消えていた。

怒りは消えて、今はぼうつとしていた。

何も考えていないという『無』というよりも喪失感に近い。

『私たちは恋人同士でいたいけれども…』と考えて海値は心の中  
で首を振った。

『けれども』という否定を意味する単語にひかっかりを覚えたか  
ら。

「…。ねえ、揺西。私たち恋人同士でいられるんだよね」

揺西の背中を見続けながら言う海値の声は、弱いものであった。

「当たり前だろ」

前を見つめたまま即答する揺西の声は力がこもっていないような気がした。

海値は返答を聞いて安心し。新たなる不安を感じ取り、それを弱めようと手に力を入れて、繋がっている事を確かめた。

「揺西。私、怖いよ」

オフィスエリアの端に近づいたところで弱々しい声が揺西の足を止めた。

久しぶりに振り返って見る海値は視線を地面に落としていたため、頭部と髪が表情を隠していた。

「恐いって、町を出ることが？」

「それもあるけれども、怖い」

「何が恐いんだ？」

揺西は手を離し、海値に近づこうとしたが、しっかりと握る海値の手に邪魔された。

「海値……」

「お願い、手を離さないで。恐いの」

「何が恐いんだよ」

「……。揺西と離ればなれになりそうで怖い」

「バカな事を言うなよ。俺たちは離れたくないから、ここまで歩いてきたんだろ。町を出るんだろ」

「……………」

海値は首を振って否定した。

「違う」

「違っって何が」

「……………」

海値は首を振るだけであった。

「海値、何が違うんだ？」

「恐いの。私たちの仲が壊れそうで恐いの」

「海値……。俺には何が言いたいのかさっぱりわからない」

困惑する揺西に対し海値は顔をあげた。

そして不安な泣きそうな顔を揺西に見せた。

「どうしてだよ。何で壊れるんだよ」

「……………」

まっすぐ向ける揺西の視線に海値は視線を逸らしたが、揺西は繋いでいない手で海値の頬に触れ顔を固定し、まっすぐに見つめた。

「どうしてだよ、海値。何でだよ……」

「……。わからない？一緒にいて気づかない？

一緒にいて。つきあっている気分い思えない。楽しいとは思えない」

「思えないって『つきあっている』ってそんなものだけじゃないだろ」

「じゃあ、揺西は『つきあう』ってどういう事を言うの？キスとか、そういう事をするためだけなの」

「……」

一つの単語に揺西はカッとなったが何も言わず表情もすぐに消した。

「そんなんじゃねえよ……」

言葉を吐き出し、揺西は顔に触れていた手を離し背を向けた。歩き出すために。

でも、どの方向に行こう。

揺西は都市脱出にためらいを覚えた。

だが、元来た道に戻る勇気もなかった。いや、本当に帰ろうか悩んでいた。

どうしよう……。

怒り任せに町を出ようとしたものの、海値との会話で戸惑い、勢いを失った。

揺西は後ろから海値の視線を感じた。

「戻ろうよ、揺西」

海値に促され足を向けたかったが、戻れば自分たちの関係を否定



しているようにも思えた。

「戻れば、俺たちは関係が壊れる事、認めることにならないか」

揺西はそれを口にした。

「町を出なければ、俺たちはあの女に仲を壊されるんだ。町に戻れば、仲を壊されてもいいって事になる。認めることになるんだ。海値はそれでもいいのか」

「……………」

へりくつな言葉でも海値は何も言わなかった。

何も言わず…ただ時が流れた。

人工の日が沈もうとするなか、手をつないだまま立ち尽くす影が弱く、やがて消えようとする。

繋いだ手は離れないまま。

「……………」

「……………」

2人は何も言えないでいた。

だから一番会いたくない人物に声をかけられても、ほっとするこ  
とができたのだろう。

「揺西君、みっちゃん。どうしたの？こんな所にいて」

驚いてはいるが、エネルギー施設の関係者である戸立がここに  
いるのは計算されてたものであるのは明らかであった。

「何がこんな所にだよ」

揺西は戸立を睨みつけ背を向けた。

「あっ」

歩き出すために海値の手を振りほどいて。

「揺西」

揺西は逃げるように離れていった。

「……………」

海値は再度、名を呼んでから戸立が近づいてくることに気づいた。  
「失礼します」

戸立に捕まることをおそれ、海値は駆け出した。

## 帰路

日が沈み闇の濃度が高くなってゆく。

走れば走るほど視界が狭くなり、不安が少しづつのしかかっている。

海値は自分が泣いていることに気づいていた。

揺西が手を離れた事に対しての涙であると。

握っていた手が離れた時、海値は見えないモノ、何もかも一緒になつて切れてしまったように思えてならなかった。

「……………」

目の前にあるビルから人が出てきた事に方向を変えて走り出そうとしたが、曲がった先には5、6人ぐらいの人が集まっていた。

仕方なく、人の少ない方を選び、泣き顔を見られないように走り抜けて行く。

走る海値にこみ上げてくる感情にひたっていられなかった。

しかし気を緩めれば涙があふれていく。

「とにかく…中央エリアに向かう…」

小さな声で自分に言い聞かせ、海値は車道にある看板を見上げる。

前方 中央エリアへ

左方 工業エリアへ

後方 都市外へ

「……………」

今の海値に後方へ向かう考えはなかった。

もしかしたら揺西が待っているのかもしれない。と、頭に浮かんだが、海値の足は前方に向かうだけであった。

歩道を走り続ける海値は不安な音を聞いた。

1台の車が通り過ぎることなく、減速し、クラクションを鳴らした。

「海値さん？」

戸惑うように呼ぶ声に海値は不安を拭い去ることができた。

田崎は車を止めて、助手席に身を乗り出した。

「お帰りですか？よろしければ、乗って……」

気が緩んだ海値からどつと涙があふれだしていた。

「海値さん、とにかく乗ってください」

わざわざ車を出て助手席のドアを開ける田崎の行動に、素直に従うことにした。

ドーム都市内を走る車は町専用のもので、ガソリンはなく湯水のように使えるエネルギー、電気自動車である。

さらなる改良を加えた電気自動車に音なく、室内は海値が泣くために必要な音と、田崎が気を利かせてかけたラジオが響いた。

「……………」

田崎は車道上の看板を見上げ、声をかけて良いものか悩んだ。

というのも都市で車が使用できるエリアが限られているからであった。

人工でまかなえる、大きくはない町。

限られた敷地内で活動する者がほとんどで公共のバスがあれば十分間に合った。

都市内専用の電気自動車しか走行が認められていないので車の需要は足りず値段もかなり高い。

田崎のようにレンタルすれば、駐車場という限られた都市内で余計な土地を探し維持費に悩む必要はなかった。

車を必要としない都市内なので車道は細く、都市は『クリーンな空気を』と掲げ、車の制限を徹底的にした。

特に住宅エリアは宅配などの営業、緊急車両以外は入れないよう

になっていた。

田崎はバックミラーから海値の様子を伺おうとしたが、鏡で海値と目が合った。

「そろそろ住宅エリアですね」

薄暗い車内、泣き顔がいつそう痛々しく見えてしまう。

「そこから辺で止めてください。すいません。ありがとうございます。た」

田崎はウインカーを両方に灯し、車を止める。

少しでも彼女を元気づけたい田崎は、小心者の運転手のように慌てて運転席を出ると、助手席のドアを開けた。

「すみません」

海値が席から立ち上がっていくのに励ます言葉が思いつかない。

「海値さん、ココアはどうですか？」

自動販売機に目が止まり、慌てて財布を取り出した。

少しでも力になりたい、断られる前に買って元気づかせようと思いい、動作は焦り無様になってしまう。

「待ってください、今…すぐに…」

田崎は言葉を閉ざした。

言葉を失ったのは、海値が背を向けて走り出したのではなかった。

「みち…さん？」

海値らしき人の気配が後ろにあった。

田崎の背中に何か小さな感触がした。

海値の頭が田崎の背中に触れているとわかった時、目の前の自販機が音をたててココアを落とした。

「……………」

田崎は動くことなく、背中から伝わってくる少女の僅かなぬくもりと、小さな鳴き声を耳にした。

「揺西が…離れていっちゃう。もう、戻れない」

2人の関係は（施設内では）有名すぎるため、現場を目にしている田崎でも揺西と何かあったぐらいは冊子がついていた。

涙を流す海値を知り、それが容易な問題でない事も。

「もう、戻ってこない…揺西は涙羽の所に行ってしまう…」

海値の弱々しく、心の底からたまっていた不安を口にした。

彦星と織姫という都市が決めた仲に挟まれる形となっていた海値が『それ』を口にする事はなかった。

だが気にしていないわけではない。不安はいつでもあった。でも、まだ余裕は残っていた。不安を口にしなくても、揺西が近くにいるいつでも会える優越感により、それを口にする必要はなかった。

しかし、不安に揺れ動く中での脱走が失敗し、揺西は海値の手を離してしまう。

ただ手を離しただけだが、海値にとってその手と手は、結ばれていた運命の糸同然に思っていた。

手が離れたことにより、それも切れてしまった。

海値が涙を流す理由はそこにあった。

「……………」  
田崎の背中に海値の小さな両手が触れた。

一度『それ』を口にしてしまった海値から周りの視線を気にする冷静さを失い始めていた。

車を止めた自販機に、ビルはあっても人の姿はなく、闇中にたたずむ2人に不審な視線を向ける行人の気配もなかったので、田崎は周りの視線を気にする必要はなかった。

「……………」  
田崎は背中では泣き続けている海値に胸がつかまっていた。

彼女を助けてあげたいという、思いが。

このままだと彼女は1人になってしまう。という言葉が浮かんだ。揺西君には彦星がいる。施設の関係者がいる。

だけれども彼女は1人だ。生物に好かれていても、彼女は関係者ではない。

1人、白い世界に取り残され、立ち尽くしている海値の姿を思い描いた田崎は、無意識に海値から背中を引き離し、向きをかえて腕

を伸ばした。

伸ばした腕が海値に触れる寸前で田崎は我に返り、少女に触れていいものかという戸惑いを覚える。

だが、うつむいたまま動こうとしない海値の姿を目にし、ためらいを消した

腕は柔らかくぬくもりのある感触を伝えた。

海値は腕にとらわれた事にびくつと震えたが、抱き寄せられ頭を頬に触れる、田崎の胸に安堵感を覚え目を閉じ、顔をうずめた。

「……………つく」

腕の中で海値の泣き声が耳に届いたが、田崎は安心して時の流れに身を任せた。

海値を守ってあげたいという思いは、小さな子供を守ってあげたいという保護者的な考え方であったが、田崎は別の思いがある事を知っていた。

『…それは、小一君に対する危機感が強くなってしまいましたが…仕方ありませんね』

心の中で唱えた田崎は、海値を優しく見続けた。

## 告白

海値さんを守ってあげたい。

あの子は『塔』に直接関係していない。なのに巻き込まれている。助けなければ

閉ざされた塔から救出しなければ。

あの子は、もう、これ以上、悲しむ必要なんでないのだから。

…というのが田崎の論理的な思いであった。

24の男が7才も離れた、それも高校生を好きになる。その時に生まれる戸惑いをなくすために必要な論理らしい。

世間一般的な年の差がはなれたカップルはそんな理論がなくても『好きになるのに理由なんてない』というものだが。

人を敬いすぎる田崎にとって、いくら壊れてようとしているとはいえ幼なじみから奪い取らなければならぬ恋。理由の一つや二つがなければ恋を始動することができなかった。

もちろん正論を必要としなければ、田崎の恋も世間一般と変わらな

ない。

「とはいえ、その思いが海値に伝わったわけではない」

現実を語ったのは地を這うような低い声であった。

「なぜそれを？私は何も言ってますん」

「お前の顔を見ればわかる。もちろん、我の勘もある。

だが、もちろん、その思いが伝わることは永遠にない。今、この場で処理してやる」

エネルギー施設の塔内部。人通りの少ない通路を選んだばかりに田崎は窮地に陥っていた。

「それは…そうと、小一さん。どうして、ここここに？」

長く灰色の毛を持つ牛顔が近づき、ニワトリのように鳴いてしま

つたが、刻一刻と迫ってくる危険に怯えていた。

「お前が放つ、消してやりたい気配と二オイがする。人間どもの目さえなければ塔の外だって出られる」

小一の間後が長々と続けられるのは、人が来る心配がないからであろう。

とどめを指した時間も加えて…

「お前の気配は更なる危険に達した」

「ここ小一さん。殺傷は犯罪です」

「何をいまさら。彦星は人権無視されている。

我の素は改造した人間だ。塔の中では人一人、いなくなつたところで何の問題も起こらない」

「……………」

返す言葉がなかった。

そして沈黙は危険に近づいた。

「遺書はないか？ないな」

「かか勝手に決めないでくださ…ひっ」

田崎が壁にくっついていていた体を右に逸らし、間一髪で避けられたのは、本能によるものだろう。

続く二攻撃目、三攻撃目をかわせたのもそうだが、本能は長く続いてくれない。

というより田崎が本来持つ『お間抜け性格』が発動されてしまった。

「うわっ…わあっああああ」

つるりと滑つたが、そこは大人。体勢を立て直し転倒を避けた…が、そのチャンスを一が見逃すわけがない。

闘牛と化した外夢小一は頭を少し下げ角を標的に向ける。

今までずーつとあげていた田崎の悲鳴は衝撃にかき消された。

壁に音と振動が伝わり、田崎は誰も助けに来てくれない事に恨んだ。

とりあえず、生きていた。



「……………」

生きた心地はしないだろう。

壁に小一の角がめり込み、田崎の両脇にそれがあつた。いつの間にか腕を上げていたので怪我はない。

しかし、田崎の胸部に小一の額を始めとする顔が触れる程度に当たっているのです、喜べる状態ではない。

「今いる場所に感謝することだな」

「それは、消さないでくれる…と、という事ですか？」

田崎の蚊がなくなような力ない声に小一は否定した。

「足がつくからだ。ここで、お前の死体が転がっていれば、犯人が我になる。」

それは大好きな海値に嫌われるからだ。

だから、お前に向ける殺気が消えたわけではない」

「そ、そうですか。ほっとしました」

「お前に安全などない。場所が変われば、証拠隠滅できる場所なら、いつでもとどめを刺す。」

だが、この場でも狙う。お前の居心地を悪くするため」

小一の顔が引き、角が壁から離れてゆく。

「歩け」

ほっとする暇もなく、小一は軽く角を振り、田崎に歩けと言いつた。

長い通路を進み、それから小一は口を開いた。

「ぶもっ」

「小一く…ああ、田崎さんまで」

海値の気配を感じ取った小一は穴のあいた壁を見られないようにするため田崎を移動させたらしい。

「……………ぶもっ」

小一は一度振り向き田崎に鋭い視線を向け口止めをしてから…いつものように海値へ寄っていく。

「ぶもうじやないでしょ小一君。また、性懲りも泣く抜け出して、しかも田崎さんまでいる。田崎さん大丈夫でしたか？」

「何ともないですよ」

小一の視線を受けながらの返答であった。

海値の後ろからやってきた職員たちに回収され、2人はこの前の出来事を思い出すしかなかった。

「すみません、田崎さん。…あんな恥ずかしい所を見せてしまつて」

床に視線を落とす海値を優しく見つめる。

「気にしないでください。人間、生きていれば色々あります。

私でよければいつでも来てください。

あ、いや、慰めとかじゃなくて、ストレス発散のサンドバック代わりに」

田崎らしい返答に『ふふっ』と海値は笑い、田崎は気まずい雰囲気気が和らいだことにほっとした。

「良かった海値さん元気そうで…」

それを口にした途端、通り雨のように海値の表情は急変してしまつた。

「……………」

海値は首を横に振つた。

「どうすればいいのか…わからなくなりました」

長い沈黙の後、海値はぽつりと言つた。

「揺西…あの後から会っていないんです。見かけることはあつても、声をかけられなくて」

「今は近づくだけで辛くなると思います。少し距離を置くべきではないでしょうか」

「……………」

田崎の言葉を聞き入れるまで海値は時間をかけて考えた。

「田崎さん…聞いてもいいですか？」

「何でも聞いてください」

「語り継がれている七夕伝説は、ハッピーエンドになるんですか？」  
田崎は返答に困り、海値の言葉を聞いた。

「離ればなれの織姫と彦星は、年に1回会えるようになったけれども。2人が天の川を越えて、永遠に一緒になれたというストーリーはあるんでしょうか？」

「七夕伝説は中国や他のアジア圏内にも存在すると聞いたことがあります。……そこまでは……」

「そうですね。田崎さん。」

『外夢の町』にある七夕伝説はどうなるんでしょう」

「それは、私にはわかりません」

「……そうですね」

「海値さん。今はあまり考えないほうがいいですよ。」

もしよければ、私がお供しますよ。」

あ、いや、別に変なことじゃないですよ。買い物荷物持ちとか雑用で、海値さんの沈んだ気を元気にするためのものです。こき使ってください。」

あ、でも、それだったら高校にいる海値さんのお友達がいいますね。何を好んで施設に関係のあるむさい男よりは」

「田崎さんて優しいんですね」

海値から微かだが笑みがこぼれた。

その笑みに隠された『まだ癒えない悲しみの表情』はあの夜、背中に顔を当てたものと変わらず。」

同じ感情がこみ上げてきた田崎は、両腕を海値に伸ばしていた。

「……た、田崎さん？」

驚き、動揺する海値は、そのまま腕の力に従い、田崎の胸部に触れた。

「これ以上、海値さんが辛い思いをする事なんてありません。」

私でよろしければ、海値さん、あなたを癒してみせます」

「……………」

「海値さんのために」

海値は何も言わず、長い間、田崎に身を預けていた。

田崎さんの鼓動が聞こえる。

「忘れるべきです。塔の伝説など」

「……………」

海値の体が離れたのは、さらなる時が流れた後だった。

反発することなく離れようとした海値の意思に従い、田崎の腕は簡単に解除する。

離れた海値は視線を落としたまま。

何も言わず、一礼だけして去っていった。

「……………」

田崎も何も言わず通路を歩き出した。

「おい、田崎」

「ひっ、いいい居荒さん」

角を曲がるや否や現れた声と姿に田崎はコミカルな動きを使って驚いたが、先輩は無反応だった。

とはいえ鋭いものはなく、穏やかに見える。

「居荒さん、もしかして見てたんですか？」

「何がだ？」

「い、いえ。見てないならいいんです」

「？」

まあ、いいや。

それより田崎、飲みに行こう。今日は特別な商談がうまくいったから酒が飲みたいんだ」

田崎が居荒と飲み連れていかれた後。

「……………」

田崎はようやく意識を取り戻した。

「ここは…いててて」

頭を押さえ、田崎は見慣れない部屋を見回した。

滞在用に借りている施設内の一室だから見慣れないのは当然なのだが。

強引な先輩に飲まされた後の朝なので、ひどい二日酔いが田崎を襲う。

起き上がった田崎は、スーツ姿のままベッドで眠っていた事を理解し、それから大事な事に気が付いた。

開いたままになっていた携帯は12時を過ぎていた。

「うわああああ、遅刻だっ」

自分が上げた声に頭を押さえ、痛みに耐えてから田崎はベッドから転がるように床に降りる。

「わっわっわ。ご飯、それよりもシャツを取り替えて歯と髪…ゴミは日曜日だから出さなくていい…違う…ここはアパートじゃないから出さなくてもいいんだ。あれ？」

田崎は自分が口にした事に気づいた。

「…日曜か、今日は」

念のため携帯の日付を確認してから、安堵しベッドに身を預ける。

「はあく良かった」

田崎は日付と時計の数字しかない殺風景な待ち受け画像を見つめていたが、うつぶせに体勢を変えてから操作を始めた。

「ふふ」

田崎は画面内に現れた海値の画像に笑みを向ける。

横顔の海値は視線を前方に向け、撮られてた事に気が付いていないのを表していた。

それもそのはずだろう、画像の詳細に書かれている撮影の日付は七夕祭りよりも前になっているのだから。

「……………」

田崎は長いこと画面を見続け、それから仰向けに体勢を変える。

「いくら諦めようと思っても、駄目でした」

年の離れた女子高生。しかも幼なじみからの相手がいる。という状態に、いくら鈍感型田崎でも立ち向かおうとは思わなかった。

「私の前に初めて現れた時から、あなたに思いがありました。」

でも、あなたを好きになるのに障害が多すぎました。だから抑えていました。海値さんが好きだって事を。

バレないように周りの目を気にして、私自身、自分に嘘をついて時には『この恋愛は成功するわけがないだろうが』と言い聞かせたり。

でも、それが裏目にでたようです。

押さえつければ押さえつけるほど。思いは反発し。とうとう行動に出てしまいましたよ」

田崎は『ふふふ』と待ち受け画面に笑ってみせた。

「海値さん。私とあなたは良い関係になれますよ。だって、小一さんが言っているんですから。小一さんが嫉妬するほどに、ね」

## 外夢の町にある七夕物語

どうでもいい…。

何を考えているのかわからなくなった。

『どうしたの？』

ガラス一枚奥にいる涙羽が不安げな表情を作っていた。

ここはエネルギー施設メインルーム内。揺西は涙羽に呼ばれていた。

「なんでもない」

否定するものの、揺西の視線は床から離れない。

「……………」

海値の手を離してしまった。

あの時『離さないで』と訴えていた理由が今になってわかった。

あの時、つないだ手は、ただ手と手が触れているだけではなく、ガラスのように壊れやすく繊細な糸が繋がっていた。

俺たちが『つきあっている証拠』繋がっている証拠。

それを離してしまった。俺が壊してしまった。

「……………」

もう壊れてしまった…。

壊れて…もう…

『揺西…？』

ガラスのように透き通った目が揺西を覗き込んでいた。

「……………」

「……………」

視線を落としたまま答える揺西は、痛いほど純粋な視線を感じた。海値の存在を知らないどころか、何もかも知らない涙羽の視線。

『「どこか痛いの？』

知らないからこそ言える純粋なる問いが、耳に突き刺さる。

『悲しいの？』

首を横にふった俺に涙羽は次の純粋な質問をした。

『揺西。悲しそうな顔をしているよ。』

揺西、どうしたの？体が痛いのか？心が痛いのか？

揺西が辛いと涙羽も笑うことができない』

無理に笑ってでも涙羽に不安がらせたくなかった。でも、今、作った笑顔で彼女を笑わすことはできない。

『揺西。辛いことは我慢しちゃいけないよ。辛いままではいなければならないんだから』

それは涙羽が経験してきた事を言葉にしたんだろう。

涙羽は、この人工都市を支えるエネルギーを維持するため、施設の一部として働かせたのだから。

だが、外夢の老朽化により終わりが見えてきた。

涙羽は開放される。それも1人の人間として。

『でもね、揺西。辛いことはちゃんと終わるんだよ。』

あのね。（旧暦）7月7日になった時、戸立さんが教えてくれたの。涙羽、もう少ししたら、ここから出られるって』

雑じりのない笑みを浮かべて、嬉しさを表現していた。

『涙羽に大きな家とね、お花いっぱい広い庭のあるところで、不自由な暮らせるんだって……』

少しの間があつてから『それでね』と、小さな声で揺西に伝える。

『その『お家』に揺西、いてくれるよね』

彼女は純粹だった。

涙羽が放った言葉は、俺を困惑させた。

『七夕伝説』としては、この上ないハッピーエンドだろう。

離ればなれになった彦星と織姫は年に一度しかあえないでいた。

でも、2人を引き裂いていた『天の川』が消滅し、2人は大きな家を建て、そこで末永く暮らしましたとき。

めでたしめでたし。

「……………」

本来ならば、そうなるべきであろう。

涙羽は、幸福でなければならぬ。幸せにしなければならぬ。



幸せに

「……………」

心が痛い。

『揺西？』

彼女の思いに伝えてあげたい。

だけど、胸が張り裂けそうになる。

涙羽に伝えられない悔しさと、それを意味する海値への気持ちが、あの時、なんで手を離れたんだろう。海値の気持ちに何で伝えられなかったんだろう。

「……………つ。くう……………」

色々な悔しさが、込みあがってきて、抑えられずに溢れてきた。

『揺西？…揺西』

「涙羽…ごめん。俺…涙羽の気持ちに伝えられない」

涙と鼻水でいっぱい顔で、そう言うのが精一杯だった。

## 2人の物語

繋いでいた手が離れてどれぐらいたったんだろっ…もう、わからない…

「うそ…」

海値は学校の昇降口から人工の空を見上げた。

灰色の空は黒味が強く、ぽつりぽつりと降り始めようとした。

「どうしよう」

17年生きてきた海値の経験からしても、だんだん強くなる通り雨なのは判断できた。

「……………」

靴を探さなくても折り畳み傘などなく、もちろん置き傘というものはない。

「……………」

海値は後ろを振り返り、今、出てきた靴箱を見つめた。

海値たちが使用する靴箱に扉というものはなく、一目で出入りを確認できる。

…揺西。まだ帰っていない。

「……………」

海値は再度、空を見上げた。

見上げたところで変化はなく、雨足が強くなる事を忠告し続けている。

今はまだ揺西と会いたくない。

海値は走り出した。

「ひゃ〜。こんな日に限って、どうして…」

雲空の『忠告』は『警告』ではないかと思ってしまうほどの振りっぷりになり、海値は非難を決めた。

雨宿りに選んだのは商店街のハズレにある小さな個人商店だった

所。

過去形になるのは、シャッターが下ろされて長い年月がたっているからである。

商店街は『住宅エリア』にあり、近場で晩のおかずを買い求めたい主婦にとっては便利であった。

とはいえ近くにできたスーパーに押され気味で、シャッターが開かない店が多くなってきた。

海値が雨宿りに選んだ所は特にひどく、虫に狙われた良質の葉よりも空洞が目立っている。

本なら制服と髪に吸収した水分が少なければコンビニに入りたかったが、店員に嫌な顔をされるのは目に見えているので、人気のない場所をえらんだ。

「これじゃあ、風邪ひく…」

不満を口にするものの、雨空は止むどころか激しさを増そうとしていた。

海値はこの災難を友達にメールしようと鞆を開ける。

大切な精密機器が濡れないように鞆にしまっていたハンカチで拭きとってから、小さな画面に意識を集中した。

だから人が近づいてきているのに気づいたのは、その者が軒先に到着した後だった。

携帯を見下ろしている海値の視界に靴が現れたが、同じ目にあつた人がいるらしいと思っただけで気にすることはなく、淡々とボタンを押し続けていた。

海値の手が止まったのは微かな声で呼ばれたから。

「揺西…」

見上げた先に同じ災難にあつた幼なじみが立っていた。

「傘、持ってこなかったんだ」

「うん…」

「俺もだ」

「そう…」

傘を忘れたのは偶然でも、雨宿りにきたのは必然だとわかって  
いた。

「雨、止みそうにもないね」

「ああ」

海値より5、6センチ高い揺西は後を追って来ただけあって、水  
の吸収量が多く前髪から滴がしたたり落ちる。

海値は鞆にしまったハンカチを渡そうかと考えたが、揺西に接近  
しなくてはならない事に気づき、腕の力をぬいた。

2人は雨空を見上げ、気まずい空気を消した。

「海値には聞こえなかったんだ。俺、ずっとテレパシーで呼んで  
いたのに」

50センチという離れ過ぎていないが、いつもより遠くにいる揺  
西は呪文を唱えるように言葉を放った。

「涙羽じゃないから、わからないよ」

雨音にかき消されそうな返答が揺西の耳に入ったが、唇は閉ざさ  
れたまま動こうとはしなかった。

振り続ける雨は激しさを増し、軒下を密室にした。

「……………」

友達に長いメールを送信して、さらに時間が経過した。

2人は後悔していた。軒下に来たことに。

それから2人は待っていた。

時を

沈黙を破る言葉を

それを破ったのは、揺西だった。

「海値、ごめん。」

あの時、手を離れた事を後悔している」

揺西は海値の脇にある腕と、その先端にある手の甲を見つめた。

「……」  
強引に握ろうと考えたが、見えないガラスの壁が手を覆っているような気がして、視線を雨空に戻すだけだった。

「……そう」  
海値のそっけない返事が、手だけではなく海値全体を覆っている事に気づいた。

「海値…本当にごめん」

5、6センチの身長差からでも見下ろせなくなった揺西はしゃがみ、視界に海値が加わった。

「……」

海値は何も言わず、ただ雨空を見上げていた。

「もう…いいよ」

雨音でほとんど消された海値の声は揺西の耳だけははっきりと届いた。

「もう、この手は離れたんだから」

海値はその手を目の前に持っていった…はずだった。

しかし海値は揺西の手を見つめていた。

立ち上がった揺西の両手が海値の手を包んでいると理解できたのは、それから数秒後の事であった。

「海値……」

揺西は何か言いたかったが、思いつく言葉がなく、ただ海値の目を見つめていた。

揺西の強い目から逃れようとした海値は一步後ろにさがる。

それでも後ろのシャッターまで余裕があるはずだが、堅い鉄がぶつかる音がした。

背中にある堅い感触よりも海値は、壁に押し付けられた揺西が接近する気配に意識した。

「海値……」

触れるはずだった唇が背き拒否される。

「海値」

「もう…無理だよ。私たち」

「どうして」

「あの日に手が離れたから。絶対に離さないでって言ったのに…もう、無理だよ。あの日にバラバラに壊れちゃったのよ」

「……」

海値に見えない壁があつた事を思い出し揺西は離れようとした。

「七夕伝説」

その言葉が揺西の動きを止めた。

その言葉は海値が言い放つたものだった。

「……」

様さは海値の首筋に唇を押し当てた。

「よ…揺西」

全身に熱があがり、顔が真っ赤になつたが、揺西は当然という目で見下ろしていた。

「七夕伝説がなんだよ。俺たちは、そんなものために壊されてしまふのかよ」

「……」

海値は視線を地面に逸らした。

「そんなものじゃ、ないでしょ。この都市を支えるために外夢がいて、彦星と織姫が必要なんじゃない」

「織姫なんて関係ねえ。あんな鎖断ち切つた」

海値は視線を戻した。

「断ち切つたつて」

「昨日、あの女に堂々と正式に断つた。もう織姫はやらない。町がどうなるうと、俺には関係ねえ。俺は海値を選ぶと」

「……」

海値は視線を逸らしたが、すぐに戻した。

すぐに揺西の柔らかい感触が襲ってきたが、海値はすぐに離れた揺西をみつめたままだった。

「海値。二度と塔には行かない。」

もう迷わないよ。海値だけを見ている。

だから、本当に……」

海値は無言で了承した。

その目からあふれる涙で。

海値は揺西の唇を快く受け入れた。

長く、唇みたいにかわいらしいものが口の中に入ってきてても、海値が拒むことはなかった。

軒下を密室にしていた通り雨は、少しづつ弱まっている。

揺西の唇は未だに離れる様子 wasn't なかった。

海値とは違い、開いている揺西の目は何かを捉えた。

それは一瞬で揺西にも、それが何かまでわからなかった。

しかし、その一瞬、揺西の目は無意識に笑っていた。

## 目覚め

「……」

居荒はぼんやりと荒れ果てた部屋を見つめていた。

エネルギー施設の塔内部でビジネス用に借りた部屋だから、後々面倒だなと考えたが、その言葉をすぐに消し、近づいてくる足音を耳にする。

「……しかし……」

一体、何が起きたんだ？」

他人事のように言う居荒だが、一部始終すべて体験していた。

「……折れたかも、な」

壁に背もたれたまま動けない居荒は入室してきた戸立を見上げる。居荒の耳に戸立の足音が聞こえたがドアを開ける音は聞こえなかった。

ドアは壊れ、壁が新しい出入口口のように開いている事は知っているので驚かない。

「なるべく、隠密にしたいけれども、救急車を呼んだわ」

そっけない戸立の返答に居荒は怒らなかった。

怒る気力がなかった。

「なあ……何があったんだ？」

居荒は一部始終を見ていない戸立に聞いた。

「モンスターが暴れたのよ」

「一時はどうなるかと思っただけでも、安定したようだ」

織姫の告白について先輩は教えてくれました。

「織姫に愛人がいたなんて、おとぎ話じゃ適用されないがな。まあ、これが真実さ」

居荒先輩が言うには織姫こと揺西君が愛人、というより本当の恋人海値さんの事を彦星に話し。彦星こと涙羽さんは衝撃を受けたら



しいです。

彦星、涙羽さんはモンスターが放出するエネルギーを制御するのが役目。

シヨックを受けたことにより、制御能力をなくし下手すればエネルギー放出が暴走し、都市は異常事態になっていたそうです。

「水が増えれば洪水なんだから、電気エネルギーが溢れば雷大発生か？ここは空も人口だからありえるかもな」

大事件とならずに済んだので冗談を口にできました。

「これで彦星、織姫の事情も一件落着いたから、後は大人の問題だけだな」

心なしが居荒の声が低くなった。

「大人の問題…ですか」

「ああ。新しいエネルギーモンスターにするため説得は何とかクリヤーしたが、一番の問題がどうにもならない」

「問題つてなんなんですか？」

「新しいエネルギーモンスターにする人材だよ」

居荒の声はさらに低く、そして小さくなった。

「いいか、田崎。お前もここで働くんだから頭に入れておけ。

エネルギーモンスター外夢の噂は本当だ。あれは元人間だったんだ」

「……………」

田崎の無言を見て居荒はさらに続ける。

「外夢はMM-m68という未知なる薬により、得体のしれない」

あれ』に変化した。小説、どちらかといえばアニメやゲームみたいな話したが。しかも、その薬はうちの会社が生み出した芸術品だよ」

くくつと笑い、居荒はテーブルの端に置かれていたジュラルミンケースを田崎の前に移動し、開ける。

「これが…その、それですか？」

中は2センチほどの透明な立方体の箱が固定されていた。

その箱中に1センチにみたない茶色の物体がありラグビーボール

のような形をしている。

「種みたいですね、畑に植えるんですか？」

田崎は先輩からつつこみをつけた。

「ばかもん。園芸してどうするんだよ。」

や、同じか」

「どっちなんですか」

「園芸だよ。ただし人肉と土とする、な。」

この種を人間に植えるんだよ。外夢のように」

「……………」

田崎は何も言えなかった。

「ならば、私が飲みましようか。見込みのない、未来を見いだせない男にはもってこいでしよう」

田崎の言葉が初めて聞く外国語のようだった。

「……………はっ。何を言っているんだよ」

それから居荒は気づいた。

田崎の髪が半乾きになっていることを。

その目が異様な気配を漂っていることを。

「……………」

ぼうつとする田崎の頭は回想を語り始めた。

夕立の中で見た光景を。

「はっ。たかが1人の女にフラれただけじゃねえか」

それが回想を聞き終えた居荒の第一声だった。

「お前、この町に来る前まで女がいたんだろう。ましてや女子高生1人に人生を暴走するつもりか？」

いいか、一度なったら墓に埋められてもモンスターなんだからな」  
「わかつていますよ。」

私は素宇野すのの子供ですからMM・m68の威力はしっています」

居荒はそれが自分のいる会社の社長だと気づくのに数秒の時を必要とした。

「社長の息子だと？」

「ええ。愛人との間に生まれた。認知されていません」

「……………」

唐突な真実に居荒はそれを受け入れ、理解するのに時間がかかったが、疑問を口にした。

「さつきMM・m68を分からなかったじゃないか」

「私が開発部にいられたのは僅かな間です。愛人の子供だとバレるまでの間は入りたての新人社員だから雑用以上につけるわけではありませんから。MM・m68の開発の噂を耳にしても、それが本当に進められていたのかすらわかりませんでしたから。」

私は未知なる開発に興味がありました。何よりもこの仕事につき来たかっただけです」

「だがバレて不向きな営業おくりか」

「ええ」

「で、だからMM・m68に手をだそうって事か」

「力になりたいのは確かです。」

それに今の私にとって、先の未来など、どうでも良くなりました」  
「…。それって結局、みっちゃんにフラれた事を根に持っているだろ」

田崎に返答はなかった。

「はっ。勢いで、自暴自棄になっただけじゃねえか」

「……………」

何と言われようとも、私の考えは変わりません。

私は海値さんを助けるためにモンスターになります」

「田崎。お前、変じゃねえか、おかしいよ」

居荒はまじまじと田崎を見詰めた。

見開いた目から怪しい光が放たれたような気がした。

「何なんだ？お前がそこまで執着するのは？みっちゃんに、何があると言うんだ？」

「……………」

田崎は薄笑いした。

後輩の小馬鹿にした態度と共に、居荒は得体のしれない不安を感じ、机の足を蹴った。

「答えるよ、田崎。モンスターになったって何も変わらねえ。揺西は正式に織姫を辞めたってお前も聞いただろ」

「ええ。」

でも、私の行動に間違いはありません。

私は海値さんを縛り付ける鎖を解くために、モンスターになるのです」

「言っている意味がわからねえよ」

居荒は声をあげ田崎に飛び掛った。

田崎の手が異様な速さでMM - m68をつかみ取ったからだ。

居荒はMM - m68を持った田崎の手首をつかみ、もう片方の手で顎をつかみ上げる。

それから足を曲げ、靴裏で田崎の腹部を蹴りつけた。

プロレス遊びに長けている居荒の力は、田崎を簡単に後方へ飛ばした。

「何、頭おかしくしているんだよ」

居荒は無防備に倒れていく後輩を見逃すわけなく、無様に倒れた田崎の腹部に再び蹴りつけた。

つもりだった。

居荒は足に伝わってくるはずだった田崎の感触が違うのに気づいてから、目の前にある光景に気づいた。

そこには異様な光を放つ後輩の目があった。

蹴りつけようとした先輩の足を右手で受け止めて。

「先輩。私がいつまでも劣っているとは思わないでください」

夢にも思わなかった居荒は、言葉と足を離す気力を失った。

「それから先輩。あの子には特別な力があるんですよ。」

先輩がそれに気が付かなくて良かった」

田崎は笑った。その笑みはもう、人間のものではなかった。

「……」

MM・m68はどこにも見当たらない。

「……それから」

どうなったんだっけ……そうだ、モンスターになたっただっけな。風船のように一気に膨れ上がって、吐きそうなほど、顔がゆがみ始めた……。

「……あ……あ」

情けない声が自分の口から出ていた。

目の前で後輩がモンスターと化していく。これほど冷静を失わせるものはない。

田崎の一着しかないスーツ。半そでのシャツとズボンが膨らんだ皮膚に耐え切れず原型を失っていく。

餅のようにさらに膨れて、それから皮膚が変色を始めた……いや、正確には外夢小一同様、灰色の毛が生えてきた。早送りしてみる植物のように伸びて田崎の肌を覆った。丸太のような足や腕にも、いや、もう4本足でしかない。

目の前にいる生物から得体の知れない音が聞こえた。鈍い音、きしむ音。それは田崎の体内にある骨や臓器が変化しているのだろう。こみ上げてくる恐怖に居荒は無意識に声を出して、それをかき消そうとした。

「……た、田崎……おい、聞こ……えるのか」

震えて、何を言っているのかわからないが、それでも田崎の耳に聞こえたようだ。

闇と泥が混ざった色になった目がぎょろりと向いたから。

「グワアア……ガ」

化け物は理解できなし言葉で返した。

その後、居荒はフワリと浮いたような気がした。いや、気ではなく、本当に宙に浮いていた。いや、飛ばされたのだ。

石ころのように飛ばされて、遠くにあったはずの壁に叩きつけられた。

「がっ……」

居荒の耳に嫌な音が聞こえた。

しかし、必死になって化け物になった後輩を叫ぶように呼んだ。

だが、化け物は反応しない。

少し遠いところにいる化け物は、新たなる訪問者に意識を集中していたから。

「恐れていた通りだな」

それは見慣れているモンスター外夢小一だった。

『ぶもつ』としか鳴かなかった生物は人間のように口を利いていた。

後輩の衝撃を前にして、どうでも良いことになっていた。

「大好きな海値を自分のものにするため、化け物になる薬を飲む。

恐れは的中していた」

「ガアアア……」

「まだ、ろれつが回らないか。

やはり消しておくべきだった。海値に嫌われようと、こうなっっては手遅れだ」

『何が手遅れなんだ？』と聞きたかったが、それを口にするにはできないまま、居荒は目の前にいるモンスターたちを見つめるしかなかった。

灰色の長毛牛、それが2匹いる。

小さな外夢小一と同じ姿をした後輩。

田崎は僅かな間で更に巨大化していた。

2匹は互いに睨み合い、そして突進した。

「……………」

戦闘を始める生物たちを鑑賞するしかできない居荒は外夢小一が言った言葉の理由を知った。

モンスター化した田崎に勝ち目がないことを。

戦闘は一方的なもので、居荒の意識が遠いていった。居荒の精神でも、それ以上の光景は耐えられないものだった。

「…なあ、あいつはどうしたんだ？」

居荒は戸立に尋ねた。

目の当たりにした光景なのに、今の居荒は思い出せないでいた。それはあまりにも衝撃が大きすぎて、居荒の頭は忘れさせようとしていたから。

人は恐ろしい体験をした時、その記憶を封じてしまう。何かの拍子でフラッシュバックしない限り日常生活に支障をきたすものは脳が無意識に隠してしまう。

居荒の頭も変わり果ててゆく後輩の姿に耐えることはできなかった。

居荒の問いに戸立は別の言葉で隠した。

「天井を見ていた方が良いわ。特に左側を見ないように」

人の忠告に反発する居荒であったが、目を閉じて素直に従った。深いと不安が居荒を支配し、それを見てはならないと頭が警告を放っていたからだろう。

「でも、良かったわ。田崎さんがなってくれたから、外夢候補を探す手間省けたし」

「良かった、だと」

居荒は折れたと思われる、悲鳴をあげたいほどの痛みを無視して声をあげた。

「何が良かったんだよ…あいつがいなくなったんだぞ。何て、何て無責任なんだよ。田崎が犠牲になって、よくそんな事がいえるな。いいか、あいつは。確かにトロくて情けない奴だけどな。でも、あれだつて生きているんだよ。」

なのに。あんた達は物とでしかない」

「私たち都市関係者にとって、モンスターはエネルギー以外何でも無いわ」

戸立はさらりと言った。

「それに居荒さんだつてMM・m68を口にしていたのが田崎さんじゃなくて知らない人なら、腹をたてることはなかったはずよ」

即答する言葉が思い浮かばないまま、居荒は開きかけた口を一度閉ざしてから、再び開いた。

「鬼だ…あんだ達は」

「鬼よ、私たちは。私たちにとって、この町で生きていくにはエネルギーが必要なのよ。」

どんな残酷なものであろうとも。以前、自分を裏切った男が変わり果てているのを知っている者にとってはね」

居荒は公園での出来事を思い出した。外夢は戸立の夫だったという事を。

「ある意味、原子力と同じね。あれは快適な生活を送るために危険な極まりない力に頼らなければならない。」

安全な所に住んでいる者たちは平気でエネルギーを湯水のように使っている」

「…」

沈黙した代わりに救急車のサイレンが2人の会話を埋めるかのよう響いてきた。



## 宣言

「……………」

それは揺西と長い口づけを交わした後。

その帰り、揺西がコンビニに立ち寄った（ずぶ濡れでも入っていた…）時だった。

「海値さん」

通り雨でびしょぬれなので外で待っていたら声がした。

辺りを見回しても聞きなれした声の持ち主である田崎さんの姿はなかった。

「……………」

最初は空耳だと思った。

田崎さんに告白された後で、後ろめたい気分があったから。

でも、違っていた。

「海値さん……」

海値は闇に覆われた気がした。

しかし、それは風のように一瞬で消えた。いや、目の錯覚。無意識に目を閉じていたのだらうと海値の頭はそう処理した。

見渡す限り、辺りはコンビニを囲む住宅以外何も見えないのだから。

「……………」

しかし、海値は気配を感じ取っていた。

「今宵……」

気配は真後ろにあった。男の吐き出す息がうなじに触れ、耳元で低い声が届いたのだから。

「今宵、あなたを迎えに来ます」

「海値」

ささやきが終わると同時に揺西に呼ばれていた。

「…あ、揺西」

海値は慌てて振り返ったが、何も無い空間が目映るだけである。  
「海値？寒いのに」  
揺西に言われて初めて自分が震えていることに気がついた。

「新薬MM-m68は外夢に比べられないほど進化した生物を作り上げますよ」

戸立は携帯から聞こえてくるUEVコーポレーション開発部長の声に痛みを感じた。

「モンスターが『負の思想』つまり『執念』を生み出し、それが憎悪のエネルギーAnggとなって体外に放出される。

放出されたエネルギーは、装置から出る二酸化炭素と融合し、後は原子力と変わらず、核分裂による高エネルギーから蒸気を作りタービンを通して電気を作るのですよ」

「私が聞きたいのは新薬の効力です」

車両禁止区域内に入った戸立は携帯を耳と肩で挟み、開いた左手で『特別許可証』の紙をフロントガラスに貼りながら、苛立ちの声をあげた。

車は規制された住宅エリアにあった。

エネルギー施設という特別な施設だけにあてがわれている許可証を乱用しなければ、海値の危険は大きくなる。

連絡を取れた海値たちを回収したところでモンスターに襲われればひとたまりもなく、出くわした時、どう対応すれば良いのかわからないでいた。

モンスターが出現したが、それは町によって大切なエネルギーであり、殺す事はできない。

麻酔を使って眠らせようと肝心のモンスターは身を潜め、人目にさらけ出す事はなかった。異様な姿を見ればたちまち騒動が起きるはずなのに。

「とにかく、みっちゃん達を回収しなければ」

戸立は揺西から、海値が危険にさらされている事を聞き、車を飛

ばし合流しようとしていた。

日は暮れて、闇は刻一刻と濃度を深めている。その闇の色が戸立に不安を掻き立てる。

「効力ですかMM-m68は、外夢より0.5縮小するはずですよ。しかし容器に閉じ込めるのは惜しいほど俊敏な動きを見せてくれます。Angを放出する能力は当社比1.5倍……」

聞きたい情報を得たのと、事件を知らないから言える呑気な声に付き合っていられないので、戸立は通話を切り、エンジンをかけた。

「上から指示が出ているけれども、それは2人、特に揺西君に任せろわ」

自宅に戻った海値と揺西を回収した戸立は、バックミラーを覗きながら『特別許可証』を取り除いた。

2人から言葉は返ってこなかった。

「……………」

あの日の出来事を体験した海値は田崎の行動を読み取ることができた。

だが、それを2人に話すことはなく、足元にうずくまる闇を見つめ、こみあげてくる不安を必死に隠していた。

時間の猶予がない戸立は1人で話を引っ張った。

「上からの指示は、モンスターの捕獲。特殊処理班が麻酔銃で眠らせる案がほぼ決定したけれども」

足元を見つめていない揺西はバックミラーから覗く戸立の視線に気づき、後の言葉を聞かず気になっていることを口にした

「それはモンスターは海値がいらないと呼び寄せることができないから、海値をおとりに使うことですか？」

目の前にさらされた危険に気づき、海値もバックミラーに移る戸立を見上げた。

戸立は右折するため、車道に視線を向けていたが、ちらりとバックミラーから向けられる視線を確認する。

「みつちゃんか、揺西君のどちらか、囿になってほしいの」

「囿……」

「祭りに使われたアイテム覚えているかしら。涙羽が人間である事を隠すために作られた人形を」

2人は暑い夏の日と織姫の姿をした海値そっくりのアンドロイド風の機械を思い出した。

「あの人形に今、みつちゃんが着ている服を着せて、揺西君と歩いてもらおうと、いう、意見が出ているのよ」

「海値そっくりのなら田崎さんも寄ってくれる、という事？」

「ええ。でも、モンスターの前にさらす危険に変わりないわ」

「危険だよ、揺西」

海値の警告には揺西以上に知っている、田崎が持つ嫉妬に恐れていた。

もし、モンスター化した田崎が海値の姿を判断をできるのならば、揺西も判断できる。田崎が持つ憎悪が向けられることは目に見える。いる。

「だけど海値を危険にさらすことはできない」

揺西も口づけの現場を見られた事による暴走行為と推測できたので、田崎の危険性は判断できた。

しかし、その底は知らない。

「大丈夫だよ、海値」

伸ばされた揺西の腕に海値は素直に絡まったが、危険を告白しようか迷っているうちに、戸立は作戦を決定してしまった。

## 静かな部屋

海値は携帯電話を取り出し、メールを始めた。

押し黙っているわけにはいかず、言葉を伝えようとボタンを押し続ける。

エネルギー施設の塔にあるクリーム色の壁が覆う落ち着いた部屋に海値は非難していた。

揺西が海値そっくりの人形を引き連れられて外に立ち尽くしている姿が思い浮かび、海値はボタンを打つ指を速めた。

囿に来ていた服を渡し、その代わりに海値は織姫の衣装と着替えた。

「大丈夫よみつちゃん。揺西君は特殊処理班が護衛しているから」  
窓外を眺めていた戸立は、ガラスの反射で見える海値を見つめながら言った。

「ええ…でも」

「みつちゃんは、本当に揺西君を愛しているのね」

携帯から顔をあげる海値の表情に弱さはなかった。

「はい。もう、疑いません。どんな事があるかと」

「……………」

まっすぐ窓を見つめていられる少女に戸立は微笑んだ。

「羨ましいわね、その純愛っぷり。」

結ばれるはずの2人の前に新たな者が現れても、あなた達は愛を貫き通すことができた」

微笑んでいるはずなのに、戸立の目だけが他人のように悲哀を見せていた。

「戸立さん？」

「夫にできた愛人のせいで、すべてバラバラになってしまった…」

「……………」

「愛してると言ってくれたのにね…。あら、ごめんなさいね。変な

こと話しちゃって」

「あ、いえ…そのう」

返答に困る海値に対し戸立は微笑む。

2人の会話が途切れたのは戸立から鳴る携帯電話の着信音だった。

「もしもし…はい。ええ…」

重要な会話なのか戸立は扉に向かう。

「大丈夫よ。揺西君のところじゃないから」

不安そうな顔を向ける海値に微笑んでから戸立は退出していった。部屋を出た戸立は、まっすぐメインエネルギールームに向かう。

建物の外はモンスター騒動で緊迫しているというのに、中はいつもの空気だった。

人気のない。町に一秒一瞬たりとも途切れてはならないエネルギーを放出するために機械化された空間。

「この町の心臓となるエネルギーは止めればおしまい。」

おしまいを恐れて機械のように人は動き、時には犠牲となる。

この町のために」

戸立の耳は近づいてくる足音に振り返った。

「いたいた、戸立さん、探していたんですよ」

居荒ぐらいの年をした職員は数枚の書類を渡しながら話を始める。

「今、上の方からモンスター出現による『緊急宣言』を市にするべきかもめているんですよ。戸立さんも来て下さい」

「携帯から聞いた。」

でも、問題なんてないわ。モンスターが人の目をさらす事ないし。騒動そのものも30分以内に終わるわ」

「え…」

きょとんとする職員に戸立は背を向けて歩き出した。

「もし、30分たっても何も起きなかつたら、呼んでちょうだい」

「……………」

海値は戸立が立っていた窓辺に移動した。

夕立があつたのにもかかわらず、再び雨が降っていた。  
町の外と天気を合わせてドーム内の町の天候を変えるのだが、た  
まに間違いを起こす。夕立の後に雨が降る現象も

そこにあつた。

「夕立が間違い天気だったのかな……」

海値の携帯電話が着信を告げる。

「もしもし、揺西？」

返ってくる恋人の声はどれほど安堵させてくれるものか。

「もしもし……」

しかし現実には甘くなかった。

「すみません、私です」

耳に届いた声に海値は混乱した。

「た、田崎、さん？」

「はい。そうです」

「で、でも田崎さんは……モンスターになつたつて……戸立さんが」

「海値さんは、やはり揺西君を選ぶんですね」

返ってきた言葉は返答ではなく問いだった。

「……………」

田崎の問いに海値は即答できなかつた。

戸惑っている間に田崎は言葉を放つ。

「……そうですよね。海値さんと揺西くんは幼なじみだから」

携帯電話から聞こえる田崎の声は今までのと変わらなかつた。

「あの、田崎、さん」

「そうですね。ましてや、こんな頼りない男なんて。ははは」

携帯を耳に当てながら力なく笑う（人の姿をした）田崎の姿を想  
像することができた。

「ははははは。」

でも、私は諦めませんよ。海値さんの事」

その言葉を聞いた時、海値は間近で田崎の声を聞いた。

扉の開く音、目の前にあるガラスが割れる音、蹄が床を鳴らす音すら聞こえなかったのに。

間近に聞こえた田崎の声は間違いなく、この部屋にいるものであった。

ただ、耳から聞こえてこなかった。

一風の風、それだけが部屋に侵入していた。

灰色の風が海値の視界に入った時、海値は窓に背を当てた。

正確には灰色の物体に押されていた。

「……………」

すべてが音もなく起きた。

海値は背中に痛みを感じ取ってから初めて異変に気づいた。

目の前に灰色の長い毛を持つ、小一より大きな牛がいて、それが戸立の言っていた田崎であることまで理解するのに

長い時を必要とした。

その長い時の間、自分の口がふさがれていることまで理解した時、海値は初めてこみ上げていた恐怖に気づいた。

『いやああっ』

海値は悲鳴を上げようとした。しかし、人間の何倍もある大きな口は海値のそれを覆いつくしていた。

牛のしめった鼻が顔に触れ、不快と共に海値は今が現実であると認識するしかなかった。

海値は2度3度腕を振り回し田崎の大きな頭を叩き、押しつけようとした。しかし、4足の脚と大きな体でしっかりと固定

されていては、抵抗のしようがなかった。

混乱を極めた海値の意識が遠のいていく…



## 真実

「お久しぶりね。戸立こたちひたろう碑太郎さん」

戸立の姿は涙羽のいるメインエネルギールームにいた。

この部屋は彦星に選ばれた織姫か旧暦7月7日の七夕イベント時のみ入室が許されているが、織姫、揺西が辞退した

今、新しい織姫を見かけるまで戸立が受け持つこととなった。

戸立が入室すれば『プライベートタイムに入りました。』

緊急感知機能を除いた全てのサウンド映像機能をOFFにします』とアナウンスが流れ、会話や設備内の映像が遮断される。

「この町を維持するために。うるさい職員から逃れるにはもってこいの場所」

織姫に選ばれた者が持つ彦星、涙羽とのテレパシー能力は戸立にはない。

だから『涙羽が気になる』と職員に告げれば、いつでも入室可能となる。

「碑太郎さん。あなたはちっとも変わってないわ」

戸立はメタル色の巨大エネルギー放出装置を見上げる。

それから右横に備え付けられているモニター装置に指先を置き、長い長いパスワードを入力した。

『関係者と確認しました』

そっけないメッセージの後、20センチほど画面いっぱいに『それ』の姿が現れた。

エネルギー放出モニター『外夢』

外夢の灰色の毛が暗い背景で見えてるが4つ足の牛ではなかった。「また変形したのね。やめてちょうだい」

容器を見上げ声を放ったが、モニターのモニターに変化はなか

った。

「……」

戸立は外夢の容器から離れ、ガラスの容器、涙羽に近づくと軽くノックする。

『姿を元に戻すんですね。わかりました』

戸立の独り言みたいな話を聞いていた涙羽はにつこりと微笑み届かない声を送った。揺西が離れていったのに健気な

涙羽にうなづき、戸立は戻る。

「昔から変わらないわね。あなたは」

モニターに映る外夢の姿に戸立は侮蔑の視線を向けた。

「あなたは、私の話を聞いてくれないのに、あの女のためなら尾を振って忠犬のように従う」

戸立の愚痴はろろろと空間いっぱいに響きわたるが、モニターに映る外夢は4つの蹄を地につけたまま微動だにしない

かった。

まるで写真のようだが、小さく空気が浮き上がってゆくの故障ではないことを照明した。

「本当に嫌な人。」

でも、いいザマよ。あなたは2度と人間に戻れないのだから」

モニターに映る外夢の長い毛が揺らいた。

それは目の錯覚と思うほど僅かなものだが、戸立は動揺と読み取った。

「ねえ、碑太郎さん。あなたと私は似たもの夫婦よ。あの夜、あの女に全てをバラして二重生活を壊したのは私。怒り狂

ったあなたは、さらに壊した」

戸立の声が低くなった。

「でも壊した事に後悔していないわ。私の知らない碑太郎さんのい

る生活を知る留移<sup>るい</sup>は、もういないのだから。  
私たちの指示に従ってくれる留移のDNAを持つだけの涙羽に操られるがいいわ」

広い空間は重い空気が聴力ある者を圧迫していた。

戸立は子犬のように見つめる涙羽に答えた。

涙羽の言葉は選ばれた織姫にしか聞こえないが、周りの声は貝殻のような耳から聞きとれる。

「涙羽、あなたは留移という人のクローンよ。

でも、あなたは涙羽であって、他の誰でもないわ」

「……………」

涙羽はぱちくりとまばたきをしたが、それ以上の反応はなかった。  
おそらく、クローンという言葉を知らないのだろう。

彼女は都市の電力維持のために存在しているのだから。

戸立は画像に見えるモンスターに言葉を放った。戸立は悲哀の目を浮かべていた。

「外夢になったあなたは小一や田崎さん同様、強く意識した人物のところだけに発揮する瞬間移動機能がある。なの

に、あなたはそれを使わない…使う必要なんてない。すぐ近くに意識する人物のクローンがいるのだから」

戸立は悲哀の目をモニターに向けたが、外夢は身じろぎもしなかった。  
誰も声を発しない空間は沈黙に沈んでゆく。

## 闇の中で

海値は閉じていたまぶたを開ける。

薄暗い空間をぼんやりと眺めていたが、やがて思考が起動し、意識を失う直後の情報を海値に教えた。

「……………」

海値は固い床から身を起こし、そして目の前にいる気配に悲鳴を上げる。

立ち上がって逃げ出そうにも、僅かな明かりが逃げ場のない空間にいることを指し示していた。

それでも海値はそこから離れようと、立ち上がって壁まで行こうとしたが、あいにく恐怖で足に力が入らない。

「海値さん……ゴメンナサイ。あなたを驚かせてしまい」

薄暗いが灰色物体があり、そこから聞こえる声で海値はそこにいるモンスターが田崎であることに再認識した。

「はい。」

あなたを手に入れるためには、この姿しかないと思い。モンスターになれる薬を飲みました」

田崎の勝手な行動に海値は何も言えなかった。

まだ全身に恐怖があり、感情を出す余裕なんてなかったから。

「……………」

海値は何も言わず、田崎の周りにある背景を見回した。

狭い空間。田崎の横は1.5メートルほどの壁があるがその後ろは広い空間があり、僅かな蛍光灯が点されていた。

背を向けている方向の壁の上には小さな窓があり、それがドアであると気づいた時、海値はここが屋上に出入られる階段の踊り場であることを知った。

皮肉にも旧暦7月7日に揺西と涙羽が過ごしたあの空間であった。田崎の後ろにいる後ろが階段になっているだろうから、逃げよう

とすればドアを開けるしかないだろう。

しかし、今の海値にたちあがる力はなかった。それにドアに鍵がかかっている恐れもある。

もし鍵がかかっているのに開けようとして失敗したならば、田崎の感情が高ぶり何をされるのかわからない。

とはいえ、今の状況でも何をされるのかわからないのだが。

田崎は海値を運ぶために、メインルームにいる外夢の時と同じように人型に変形していた。人型であるが長い灰色の毛を全身に覆う雪男としか見えない姿だが。

「……………」

海値は僅かに照らす明かりで田崎を見つめた。

「海値さん。私は海値さんと揺西君から入り込める隙間がない事を知っています。」

でも、それと同じに海値さんが永遠に、この施設から逃れられない事を知りました」

「どう…して」

「永遠に海値さんと揺西君。そして彦星、涙羽さんの関係が繋がってしまっからです」

「どうして？」

「揺西君は海値さんを愛しても。涙羽さんが頭から離れられないからです」

「どうして…でも、揺西は織姫を辞めたから。関係は途絶えてしまっ

「でも。涙羽さんを忘れることはできないでしょう。」

それが男というものです。男と24年続けた私が言います」

「わからないわよ、そんなの。」

それに…。それに田崎さんがモンスターになると何が関係あるの「海値さん。あと少してエネルギーモンスター外夢は時を終えてしまっ

「知ってる。居荒さんから聞いた」

田崎は僅かに間をおいた。

「都市は新しいモンスターに私を起用します。」

私がエネルギーモンスターになった時、海値さん、私はあなたを彦星に選びます」

「……。そしたら、私は第2の涙羽となって。永遠に施設に閉じ込められるじゃない」

「でも、揺西君との関係は途切れます。あなたは、私のものになるのですから」

「……………」

海値は田崎の理性が壊れているのに気づいた。

モンスターになる時点で、彼から理性が崩壊したのだろう。

今や田崎は人間後を話すモンスターでしかなくなっていたのだから。

「いや…やだ。近づかないで」

薄暗い空間でも田崎の動きが読み取れる。

「海値さん。あなたはご自分の魅力に気づかれていない。」

あなたは私よりもしっかりしているし、揺西君の前ではお姉さんのようだ。

でも、あなたは弱い。弱くてもろい一面を持っている。狂おしいほど助けたくなる一面を。

それを私に気づかせてしまった」

海値は座ったまま壁に移動し、腕を伸ばした。屋上にある扉は一段の段差があるから僅かに届かない。

海値は左手を地面につけて体を浮かし、右手をさらに伸ばした。

ひんやりとしたドアノブに触れた時、田崎の灰色の毛が頬に触れる。

「いやあああ」

増した恐怖により海値の右手はドアノブを離れ、体重を支えていた左手は力を失い尻餅をついた。

意識を失えず、海値は首と全身に灰色の毛が触れるのを感じ取り、

それから体の接触を認識した。

灰色の生物が視界を覆い、海値から明かりが消えた。

それから『海値さん』と呼び続けるモンスターの声が耳に響き、嫌な接触を唇から受け取った。

「海値：さん？」

触れて数秒とたたず、田崎は海値から離れた。

海値の頬に伝ってゆく涙に毛で覆われたモンスターが気づいたんだらう。

「海値さん……」

海値は放心したまま、動くことなく涙を流していた。

「……………」

田崎は何も言わず後さずった。

それから長い時を待った。

海値の涙は短いものだった。

涙が止まった海値は、頬につたる滴をそのままにした。

「……………」

それから田崎の存在に気づいた。

薄暗い中、1メートルほど離れた田崎がじっと海値を伺っていた。何も言わず、動くこともなく。じっと海値を見守っている。

「……………」

海値も変わり果てた田崎を見つめた。

一つの思い込みで理性を壊した男。

そして今、海値の人生まで狂わそうとしている。

「良い人だったのに……」

口に出さず漏らした言葉に海値はハツとした。

良い人だからこそ。その身を壊してしまったのだと。

海値は田崎がどれほど身を焦がしていたのかは知らない。

自動販売機の前で頭を背中につけた時、田崎がどれほど傷心の海値に何かをしたいと強く思っていたとは、心の痛みで海値は知る余

裕もなかった。

しかし『良い人』という言葉により、海値はその部分に触れたような気がした。

「……………」

それから、海値は田崎の優しい行動を思い出していった。

『この人は良い人なんだ』

と思った時、海値は静かに言葉を放つことができた。

「田崎さん。」

あなたはどうしてモンスターになってしまったのですか？」

海値の言葉に灰色のモンスターは、まず海値の目をじっと見つめた。

犬が主人を見つめるように。

それから『ごめんなさい』と告げた。

「あなたに振り向いてもらいたかった。

あなたと揺西君の絆を外すには、エネルギーモンスターになるしかなかった。都市を維持するため人権のない愚かさを利用して」

田崎は静かに言った。

「でも。もう無理ですね。あなたは最後まで私に抵抗しました。あなたの心は揺西君のところにあります」

「…。ごめんなさい」

うつむいた海値は、言葉を吐き出した。

薄暗い空間の中。

2人は何も言わず、距離を縮めることなく見つめあっていた。

2人は互いに伝えたい言葉などなかった。しかし、このまま離れる気もなく、手を伸ばして触れる気もない。

2人はただ見つめあい、時だけが流れていった。

時計のない空間では、正確な時間はわからないが、2人にとって長い時間だった。



「海値さん、戻りましょう。ここにも仕方ありません」

沈黙を破った田崎は立ち上がり、海値も続いた。

「でも田崎さん。あなたはどうするんですか？」

「もちろん、エネルギーモンスターになります。このまま町に出たら熊と間違えられて大騒動になるだけです」。

そんな目をしないで下さい。私はエネルギーモンスターになるべき人物なのでから。

大丈夫ですよ。海値さん。私はあなたと同じ姿をした人形で十分です。でも、たまに愛に来てくれたなら嬉しいです」

海値は『ごめんなさい』としか言えなかった。

「いいえ。海値さんが謝る必要はありませんよ。でも…」

海値さんをお願いします」

近づいてくる田崎に海値は目を閉じた。

まぶたを閉じてすぐ、灰色の毛が海値の頬をくすぐる。

毛皮の中にある肉の感触が続いた。

唇がふれあい、感触は長く続く。

ただ触れあうだけのもの。しかも幼なじみで慣れているはずなのに、数年、数十年たっても鮮明に残る口づけとなった。

それは田崎から伝わってくる『切なさ』が唇を通して海値に伝わってくるからであろう。

田崎の届かなかった思いと共に、海値は田崎の涙を受け取っていた。

海値は唇を離さないまま、まぶたを開き、田崎の涙を指で拭きとってあげた。

それから目を閉じた。

## その後

「プライベートタイムに入りました。緊急感知機能を除いた全てのサウンド映像機能をOFFにします」

メインエネルギールームに海値の姿があった。

海値はメタル色の巨大容器を見上げるたびに、2度と田崎を肉眼で見ることが出来ず、悲哀になってしまう。

『悲しまないでください』と海値の頭に言葉が流れてきた。

これが涙羽が揺西に送り込んでいたテレパシーなのであろう。

田崎の『声』は人間の時と変わらない優しさが含まれていた。

海値は田崎の声に微笑み、それからガラスに閉じ込められた、自分と同じ姿のアンドロイド風、機械を見つめた。

立体的な鏡を見ているようで、未だに戸惑ってしまう。

「田崎さん。皆、元気でやっていますよ」

外夢がエネルギーモンスターの役目を終えた時点で戸立は施設から離れていった。同じ役目を終えた涙羽の世話をするために。

「涙羽は走れるようになっただよ」

開放された涙羽には保障された生活が待っていた。

ただしアンドロイドとして生まれたクローンに戸籍がない。それを隠すために隔離されているようなものだが、彼女は無邪気に笑っていた。

揺西や揺西以外の者と会うことができるのだから。

最初、海値にとって涙羽は、そう素直に受け入れられることはできなかつたが。涙羽と会い、無邪気に笑う姿を見るたびに警戒心が溶けていった。

「居荒さん、会社を辞めようか迷っていたって、言いましたよね。辞めないって『バカで間抜けな後輩を置いて、自分だけ新しい人生

を始めるわきにはいかない。地獄の底までつきあってやる』って言うたよ」

『ははは。先輩らしいです』

「私の方は、そろそろ進路を決めなければならぬんだ。

進路っていったって、まだ何をしたいのかわからないから悩んでいるの」

『焦る必要はありませんよ。たった一度しかない人生です。ゆっくり考えましょう。ってモンスターになった私が言える言葉じゃありませんね』

「……………」

海値は何も言わず、両手と顔を容器に触れる。

「田崎さん。あなたは優しいまま、変わらないんですね」

『揺西君と何かありましたか？』

海値は首を横に振った。

「田崎さんはモンスターになってしまったのに、私を恨むことなく私に接してくれる。」

あなたはどうして優しくなれるのですか？」

『私はあなたを愛しています。』

そして、1度だけとはいえ、私の願いが叶ったのだから。どうしても恨むことができませんよ』

「……………」

海値は顔を離しメタル色の容器を見上げた。

『海値さん。進路が選ばってください。』

それから、また、会いに来て下さい』

「海値……………」

エレベーターが開き待ち合わせの休憩所に到着した海値は、出迎えていた揺西の胸に頭を静めた。

「……………」。田崎さんの優しさに、何も答えられない。自分が恥ずかしい」

「海値が罪悪感を感じることはないんだよ。海値は何も悪いことを

していないんだから」

「……………」

2人を遠くから眺めていた居荒は、背後から近づいてくる足音に振り返り、手招きに従う。

「怪我の方はどう?」

辞めたと聞いていた戸立は私服姿だが、手にはファイリングケースを抱えている。

「とつくに完治しました。」

そういうあなたは?ここで会えるとは思えませんでしたよ」

「涙羽の成長報告書を届けにね。あの子の記録は、研究データになるから」

「……………」

居荒は何も答えなかった。それを欲しているのは自分の会社なのだから。

「事件関係者は皆、罪の償いになってしまった」

ポツリと呟いた居荒の言葉に、戸立は無言で肯定した。

「居荒さん、知ってる?エネルギーモンスターが放つAnggを」

「それが核反応を起こしてエネルギーにするしか知りませんよ」

「Anggは『負の思想』つまり『執念』よ。田崎さんの場合、愛憎になるわ」

「……………」

「みっちゃんの話からして。田崎さんは優しい一面しか見せていないよね」

「みっちゃんがいなくなった途端、ヤツは暴走をしているってことか」

「エネルギーは十分すぎるほど放出され、しかも安定しているように」

居荒は振り返り、今は壁で見えない少女を思い浮かべた。

「知らぬが仏だな」

「ええ。でも、いつかは知ることになるでしょう」

「ああ。そうだな」

「大丈夫よ。みっちゃんには揺西君がいるわ。」

天の川を跳び越えて、結ばれた2人なんだから」

戸立の言葉に居荒はうなづいた。

そして開かれた回転式自動ドアを通り、エネルギー施設の塔を後にした。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4868t/>

---

織姫と彦星と未来都市

2011年6月16日18時25分発行